

平成9年度熊野灘臨海都市公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

道瀬遺跡（第1次）発掘調査報告

—— 北牟婁郡紀伊長島町道瀬所在 ——

1 9 9 8 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター



S F 3 完掘状況（北東から）



S F 3 断ち割り状況（東から）



S F 2 埋土半裁状況（東から）



S F 2 断ち割り状況（西から）

序

紀伊長島町を含む東紀州は、三重県の奥の院と言えましょう。そこには海と山に囲まれた豊かな自然や、海の幸、山の幸があります。そして華やかな表舞台に現れることは決して多くはないものの、古い歴史と伝統の重みを持つ人々の暮らしと人情があります。三重県では志摩半島から東紀州にかけてサンベルト・ゾーン構想など、この豊かな財産を活用し、県民の皆様がより自然と触れ合える場を創造し、21世紀に引き継ぎたいと考えております。

今回の道瀬遺跡の発掘調査は、こうした地域活性のための事業に先立ち、その記録を残すためにやむなく行われるものですが、紀伊長島町では初めての本格的な発掘調査ともなりました。そして、中世では極めて珍しい2基の製塩炉が発見され、成果の上でも瞠目すべきものがありました。

本遺跡は地元の方々の地道な努力により遺物が採集されてきたものであり、この調査成果は地域の共有財産として帰すべきものであることは言うまでもありません。この上梓いたします道瀬遺跡の発掘調査報告書が、地元の方々の文化財保護意識の高揚や教育等の場でお役に立てば、文化財保護行政に従事する者として望外この上ない喜びであります。

最後になりましたが、今回の発掘調査では、県土木部都市住宅整備課、尾鷲土木事務所、尾鷲教育事務所、紀伊長島町教育委員会の他、県文化財パトロール員や地元道瀬地区の方々から様々な形でご協力を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成10年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥村敏夫

例 言

1. 本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、熊野灘臨海都市公園整備事業（三浦・道瀬地区）に伴う、北牟婁郡紀伊長島町道瀬地内に所在する道瀬遺跡（第1次）発掘調査の報告書である。

2. 調査は下記の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課
係長 野原宏司（調整担当）
技師 大川勝宏
〃 萩原義彦

3. 発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者が行い、管理指導課が協力した。

4. 本書の編集は大川勝宏が行い、遺物実測と遺物撮影は大川・萩原義彦が行った。本文の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ章を大川が、Ⅲ章を萩原が担当した。

5. 挿図の方位は全て磁北を用いた。

6. 本書で使用した都市計画図は紀伊長島町、事業計画図は三重県土木部の提供による。

7. 本書で記載した遺構・遺物の色は農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』（1988年度版）に拠った。

8. 本書で報告した図面・写真などの調査記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9. 本書で用いた遺構表示略記号は下記の通りである。

S F : 炉, 製塩炉 Pit : 小穴

10. 調査にあたっては、三重県土木部都市住宅整備課、尾鷲土木事務所、尾鷲教育事務所ならびに地元各位のご協力を得た。現地作業に際しては下記の方々にご尽力頂いた。また、紀伊長島町立郷土資料館の資料調査に関しては館長西田強氏のご協力を受けた。記して感謝の意を表したい。

大谷つき子 奥野愛 小池孝良 小池富美 坂本秀子 坂本峰雄 杉谷香千代
杉谷りよ子 高見たづ子 濱口衛 濱口睦子 濱口八重 濱田真代 濱田美輪
東成志 東浩成 湊章治 (50音順)

11. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	1
II 位置と歴史的環境	3
III 遺 構	7
IV 遺 物	14
V 結 語	22

挿 図 目 次

第1図 道瀬遺跡位置図 (1:50,000)	4
第2図 豊浦神社遺跡・城ノ浜遺跡・大名倉遺跡出土遺物実測図 (1:4、1:1)	5
第3図 道瀬遺跡周辺地図 (1:2,000)	7
第4図 調査区位置図 (1:1,000)	8
第5図 小地区配置図 (1:400)	8
第6図 調査区平面図 (1:200)	9
第7図 調査区西・南壁断面図 (1:100)	10
第8図 S F 1 実測図 (1:40)	11
第9図 S F 2 実測図 (1:40)	12
第10図 S F 3 実測図 (1:40)	13
第11図 道瀬遺跡本調査 (第1次) 遺構出土遺物実測図 (1:4)	14
第12図 道瀬遺跡本調査 (第1次) 包含層出土遺物実測図 1 (1:4、1:2)	15
第13図 道瀬遺跡本調査 (第1次) 包含層出土遺物実測図 2 (1:4、1:2)	16
第14図 道瀬遺跡出土遺物実測図 (試掘調査・資料館蔵 1:4)	17
第15図 道瀬遺跡出土遺物実測図 (資料館蔵 1:4)	18
第16図 本調査出土弥生時代末～古墳時代遺物分布図 (1:400)	23
第17図 本調査出土土製平釜分布図 (1:400)	23
第18図 志摩半島～東紀州海岸部の製塩関係資料分布図 (1:500,000)	25

表 目 次

第1表 道瀬遺跡出土遺物 (土器類) 観察表	19～21
第2表 志摩半島～東紀州海岸部の製塩関係資料出土遺跡地名表	26

図 版 目 次

巻頭カラー図版 1	S F 3 完掘状況（北東から）	i
	S F 3 断ち割り状況（東から）	
巻頭カラー図版 2	S F 2 埋土半裁状況（東から）	ii
	S F 2 断ち割り状況（西から）	
図版 1	道瀬遺跡遠景（南東から）	28
	道瀬遺跡遠景（東から）	
図版 2	調査前風景（南西から）	29
	調査前風景（北から）	
図版 3	調査区全景（南西から）	30
	調査区全景（北から）	
図版 4	6 - f 区包含層遺物出土状況（北西から）	31
	S F 1 完掘状況（東から）	
図版 5	S F 3 検出状況（南から）	32
	S F 3 上面検出状況（北東から）	
図版 6	S F 3 完掘状況（北東から）	33
	S F 3 完掘状況（西から）	
図版 7	S F 3 完掘状況（北から）	34
	S F 2 検出状況（東から）	
図版 8	S F 2 平石検出状況（東から）	35
	S F 2 埋土半裁状況（東から）	
図版 9	S F 2 炉体完掘状況（東から）	36
	Pit 1 検出状況（南から）	
図版10	調査風景（北東から）	37
	調査参加者	
図版11	出土遺物	38

I 前 言

1. 調査の契機と経過

三重県では、志摩半島から東紀州の海岸沿いを中心に、観光を中心としたインフラの整備に努めている。今回発掘調査を実施した道瀬遺跡の所在する北牟婁郡紀伊長島町でも、これまでの主幹産業であった農林水産業から観光産業にも力を入れつつあり、海水浴、釣りの他、温泉やオート・キャンプ場などが整備されてきている。

今回調査を実施した道瀬遺跡は、これまでも地元の研究や文化財パトロール員らの手によって古代の製塩に関するとみられる資料や土器・陶磁器類が採集されており、町内に残る数少ない遺跡の一つとして周知されてきたが^①、この道瀬地区に新たにレクリエーション施設を建設する、県土木部の熊野灘臨海都市公園整備事業（三浦・道瀬地区）の事業地内に含まれる事となった。このため、平成8年9月18・19日に、三重県埋蔵文化財センター杉谷政樹第2係長により試掘調査が行われた結果、事業地のうち2,300㎡については、埋蔵文化財の分布が認められる事が判明し、現状変更之际には発掘調査が必要である旨が通知された。

あけて平成9年度に入り、年度の当初においては県土木部の調査要望箇所には上げられていなかったが、5月16日に土木部監理課から、工事進行の都合により、進入路部分655㎡につき埋蔵文化財センターあて至急の調査依頼があった。これをうけて5月28日に尾鷲土木事務所との現地協議がもたれ、土木部が経費を全額負担することで当センターが発掘調査を実施して埋蔵文化財の実態を把握し、その保護に努める事となった。

今年度調査を行ったのは紀伊長島町道瀬新田地内で、先述の進入路部分についてのみ行い、残りの約1,600㎡は次年度以降の対応となった。調査対象地は海岸防波堤に接したおおむね南北方向にのびる砂堆で、かつては畑地あるいは果樹園としてミカンなどが栽培されていたが、現況はヒノキの中低木などが生える荒蕪地となっている。

先年度の試掘調査では、灰黄色砂や、やや暗黄灰

色の基盤層に被熱により赤化した面や溝などを確認しており、古墳～鎌倉時代の遺物が出土した。この中に僅かながら土製平釜が含まれ、また文化財パトロール員をはじめ地元の方々に採集され、紀伊長島町立郷土資料館に収蔵される道瀬遺跡出土品のなかにも同様の資料が含まれる事から、古代～中世の製塩跡に関する県下では数少ない調査であるとともに、同町での初めての本格的な発掘調査として、その成果が期待される事となった。

現地調査は平成9年6月30日から8月4日にかけて実施し、8月9日には道瀬会館に於いて、約70名の参加を得て地元への調査成果報告会を催した。

調査面積は、当初の655㎡に調査区南東の攪乱部分の範囲確認も加えて最終的に700㎡となった。

2. 調査の方法

今回の調査は、県内でも遠隔地であり、調査員2名は現地で宿泊する事となったため、現地作業は月曜日は午後からとし、金曜日の現地作業終了後埋蔵文化財センターへ帰庁する体制を取った。

調査地は先述のように砂堆上に立地し、次年度以降にも継続して発掘調査が行われる可能性が高いため、調査地の東に接する海岸防波堤上に基準点を2点打設し、この方向から90°振り出して調査区内に4m×4mのグリッドを設定した。小地区名は次年度以降の調査地の広がりを見込んで、調査区東南端を基準に東西を小文字のアルファベット、南北を数字に、南西の地区杭を優位に配して地区名とした。

今回の調査地内は、砂堆上でも最高点を含み、波浪による流失のためか、地表面から試掘調査での基盤面までは10cmから30cm程度までと浅く、やや壤土化するものの砂質の表土であるため、遺構面の保護の上からも重機等の機械は導入せず、全て人力により掘削を行った。しかし、畑作が行われなくなっているため、掘削が進み、また樹木の切り株や根が残されていたため、高温多湿で雨天気味の天候と相まって表土掘削には予想外の労力がかかり苦慮する事となった。

なお、遺構検出面である基盤面まで浅いために、純粋な表土部分と遺物包含層にあたる部分は全く判

別できず、一括して扱っている。

調査の結果、2カ所の製塩炉とみられるものを含む赤化面や焼土面、炉跡を検出したが、遺構数は少ないため、各遺構については個別に1:10、1:20の詳細図を作成したが、調査区の全体平面図については1:100の平板測量を行った。

3. 調査日誌抄

- 6/17 尾鷲土木事務所と調査前の事前協議（公園等担当：松尾登・斎藤賢，埋蔵文化財センター：野原宏司・大川勝宏・萩原義彦）
- 6/30 調査資材等搬入。大川・萩原現地入り。
- 7/ 1 コンテナハウス等設置。調査区内に小地区を設定。作業員による作業開始。調査区東南端から表土掘削を始める。
- 7/ 2 降雨により現地作業中止。資料整理等を行う。
- 7/ 3 朝から酷暑。砂堆上ながら表土が固く、作業に手こずる。
- 7/ 4 昨日に続き酷暑。3-eで伊勢型鍋を伴う焼土面とそこから広がる炭化物層（SF1）を検出。文化財パトロール員東成志氏来訪。
- 7/ 7 6-dで炭化物面（Pit 2）検出。SF1の撮影、実測。
- 7/ 8 7-bで焼砂面（SF2）検出。この付近から土製平釜片がまとまって出土。
- 7/ 9 SF2の撮影と実測。
- 7/10 降雨のため現場作業中止。紀伊長島町立郷土資料館で資料調査。
- 7/11 降雨のため現場作業中止。
- 7/14 9, 10-cで焼砂面検出（SF3）。調査区東辺は幅約4mに渡り堤防工事で攪乱されている事が判明。
- 7/15 気温下がり、調査区北部の掘削進む。
- 7/16 調査区の表土がほぼ除去される。清掃後全体写真を撮影。
- 7/17 降雨のため現場作業中止。道瀬周辺の埋蔵文化財の踏査を行う（比叡遺跡等）。
- 7/18 SF2の精査に入る。焼けた炉壁確認。製塩炉として認識される。
- 7/22 SF2周辺を一段下げて掘削。SF3周

辺も精査し、これも製塩炉と確認。湊章治氏（元県文化財パトロール員）現地指導。

- 7/23 SF2の赤化部分を追う。SF3も周辺を一段下げて全体の検出を行う。20cmコンターの調査区平面図を平板測量。
- 7/24 SF3の略楕円形の炉体検出される。午後から台風9号への現場対策始める。
- 7/25 SF3上面の黒色土半裁。SF2周辺の攪乱土除去。台風対策を念入りに行う。
- 7/28 午後から降雨著しく現場作業中止。
- 7/29 SF3完掘、撮影。SF2の炉体検出。
- 7/30 SF3炉体半裁。
- 7/31 SF3撮影、実測。SF2炉体上部の黒色土除去。
- 8/ 4 SF2の炉体を精査し半裁して撮影、実測。掘削作業終了。現場コンテナハウス等撤収。
- 8/ 8 調査資機材の撤収。
- 8/ 9 道瀬会館において、調査報告会実施。

4. 文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等に行っている。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成9年6月26日付教文第1227号（県教育長通知）
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成9年7月1日付教埋第387号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（尾鷲警察署長あて）
平成9年9月22日付教埋第11-40号（県教育長通知）

註)

- ① 湊章治他『紀伊長島町史』P35 1985

Ⅱ 位置と歴史的環境

道瀬遺跡（１）のある東紀州一帯の海岸部は、中生層を基盤とする台高山脈の南端部が迫り、沈降性のリアス式海岸や岩礁地、大小の島嶼を形づくっている。こうした海岸線の入りくんだ所に「浦」ができ、砂堆が形成されて砂浜海岸となったり、後背地に汽水性の海跡湖を残す。道瀬遺跡はこのように形成された道瀬浦の南端部、標高３ｍ～５ｍほどの砂堆上面から後背地に立地し、前面の海上には丸山島や鈴島、赤野島といった島嶼が点在して砂岩や頁岩の互層が露頭している。行政的には北牟婁郡紀伊長島町道瀬字新田に属し、現在の主要産業はタイやハマチの養殖やサバ・サンマ等の近海漁業、ミカン等の農業、民宿や釣り船等の観光業である。

道瀬地区が文献上初めて現れるのは、各種影写本として伝世する『莊司家文書』で、貞和２（1346）年４月20日の「木本莊司職の事に拠りて嶋方々の御寄合の事」に他の近郷と並んで「たうしの衛門太郎との」の名があり、海山町相賀付近に中心を置いたとされる木本御厨の影響下にあった事がわかる^①。

それに遡る道瀬遺跡を中心とした原始・古代の様子は、主に地域の研究者らに地表面調査されたり、あるいは土木工事の際の不時発見により遺物が採集されるといった形での資料しかなく、道瀬浦においても道瀬遺跡以外の遺跡は知られていない。

道瀬遺跡周辺に目を転じて、中世末期まで時代の順を追って見ていくと、二郷神社遺跡（４）で縄文時代後期の土器片が、また片上池周辺でも中期里木Ⅱ式の土器片が採集されたといわれており、片山B遺跡（２）ではサヌカイト製やチャート製の石鏃や石匙等が採集されている。海山町内では矢口網代遺跡（17）で後期の土器や石器が知られている^②。

弥生時代では片上池周辺（２，３）、二郷神社遺跡、豊浦神社遺跡（11）で道瀬の近隣では海山町大白遺跡（13）や船越遺跡（14）で後期末～古墳時代初頭の土器が出土している。東紀州では弥生前期から中期初頭の遺跡はほとんど知られていないが、後期末～古墳時代初頭の遺跡は志摩半島から東紀州一帯にかけて増加する傾向が窺われ、概して東海系の二重

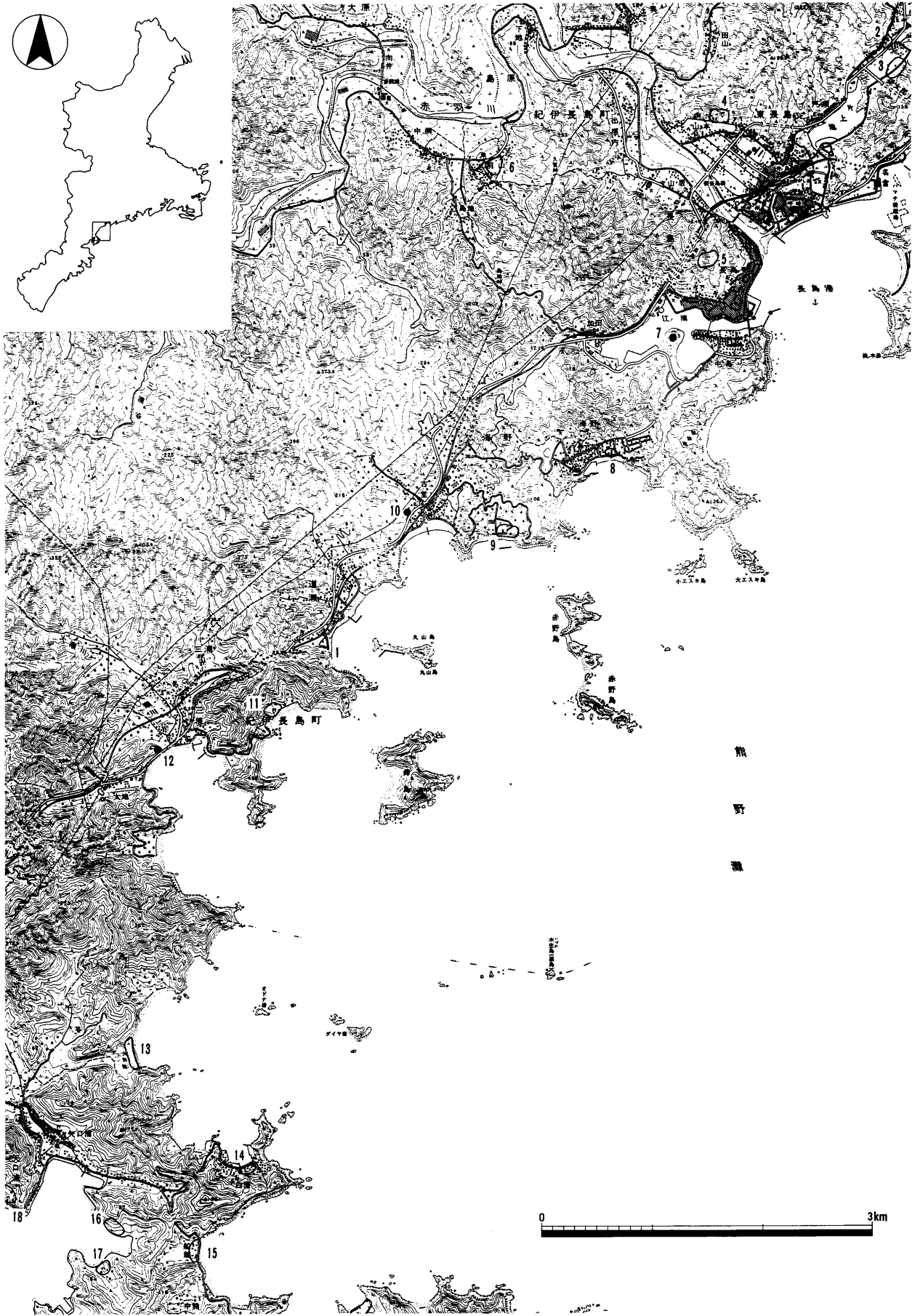
口縁壺や高杯、S字口縁台付甕などが目立つ^③。道瀬遺跡でも当該期の遺物が採集されている。

古墳時代では二郷神社遺跡、豊浦神社遺跡、比叡遺跡（９）、海野遺跡（８）で土師器片や須恵器片が出土している。古墳では道路工事の際に金環２個の他、直刀、合子が出土したとされるおまわき古墳（10）、須恵器片が出土した太地古墳（12）、銀環や鉄刀、土師器片、須恵器類が出土し、関西大学により須恵器器台等が資料紹介された横城古墳（７）があるが^④、これら古墳はいずれも土取りや道路工事により破壊され消滅している。

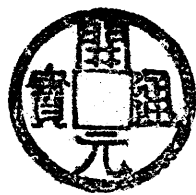
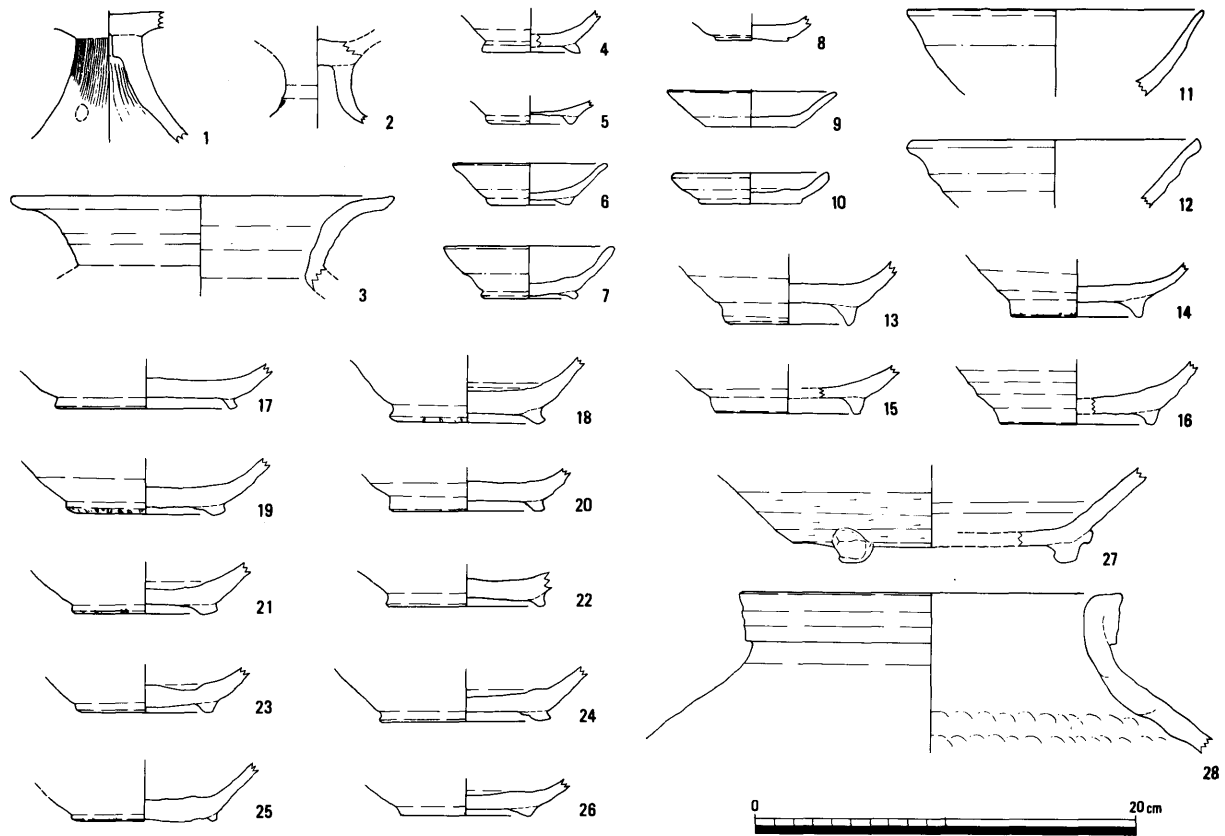
古代から中世末期まで当地域は志摩国英虞郡に属したとされる。飛鳥～平安時代では片山B遺跡、豊浦神社遺跡、海野遺跡、比叡遺跡から土師器片、須恵器片の散布がみられるが、古代末から中世にかけて製塩に関する遺構・遺物が認められる遺跡も現れる。東長島の城ノ浜製塩跡、大名倉製塩跡は平安時代以降のものだが、海岸砂堆上で製塩炉に伴うとされる焼石や灰層がみられ、特に城ノ浜では土製平釜片も多量に出土している。道瀬遺跡を含め、これら製塩の物証が認められる遺跡以外にも町内の豊浦や比叡でも製塩跡があったといわれるが不明である。

南北朝期に成立する『神鳳抄』によれば、古代末期～中世前期の当地域には丹島御厨（紀伊長島町二郷）、中島御厨（紀伊長島町長島）、木本御厨（海山町相賀周辺）等の伊勢神宮の所領地があったとされる^⑤。『莊司家文書』によれば、嘉保元（1094）年に息長宮貞が神宮祭主大中臣氏により木本御厨の檢校職と山預職に補任されたのを始めとして、天治２（1125）年に常貞が檢校職に、治承２（1178）年に恒吉が、寿永２（1183）年には地頭職の配下に清貞が下司職に任じられ、木本御厨を拠点に息長氏を介して神宮と当地域が繋がっていた事が分かる^⑥。

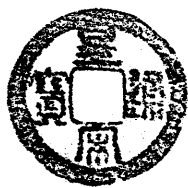
鎌倉時代の遺跡として豊浦氏館跡（11、別称行長宅跡）がある。豊浦氏は先の「木本莊司職の事に拠りて嶋方々の御寄合の事」にも「三浦の窪の豊浦左衛門次郎」、「豊浦宮内兵衛」という名が散見しており、先の「たうしの衛門太郎」などととも近郷



第1図 道瀬遺跡位置図 (1 : 50,000)



29



30



31



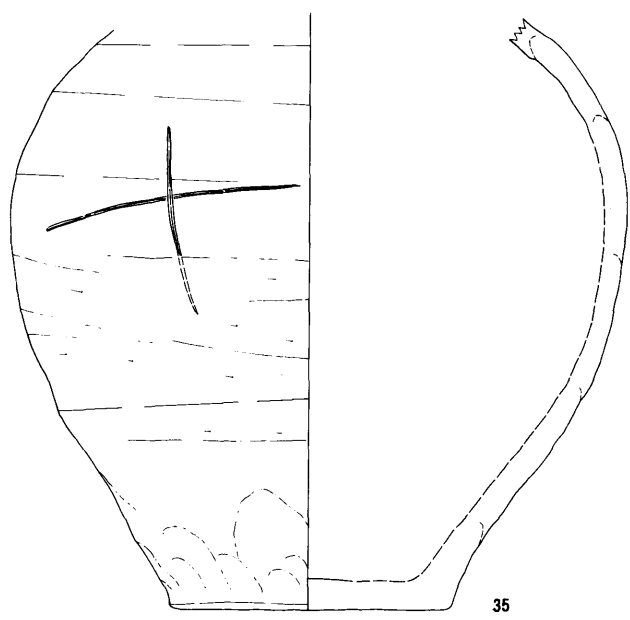
32



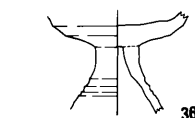
33



34



35



36



38



40



42



44



37



39



41



43



45

第2図 豊浦神社遺跡・城ノ浜遺跡・大名倉遺跡出土遺物実測図 (1:4, 1:1)

1~35: 豊浦神社遺跡、36~40: 城ノ浜遺跡、41~45: 大名倉遺跡、29~34は1:1、他はすべて1:4

の在地勢力が木本御厨の影響下にあった事が窺われる。豊浦神社遺跡からは第2図に示したように、工事中の不時発見により、山茶碗に伴って約6,500枚もの備蓄銭が出土しており^⑦、狹隘な海岸ながら前面の鈴島とともに在地勢力の拠点として機能した事が窺われる^⑧。鎌倉時代後半には、弘安2（1279）年の『兼仲卿記裏文書』の「伊勢国西方寺別当行兼申状」に丹島御厨へ守護代等が打入り悪行を行い、神役が闕怠する状況にあった事が述べられ^⑨、また同じく弘安10（1287）年の「伊勢木本合賀嶋雑掌申状」にも木本御厨での百姓等の年貢の対捍が訴えられており^⑩、当地域の御厨における神宮勢力の弱体化が窺われる。

南北朝期の当地域は南朝方の勢力下であり、木本御厨には木本源太左衛門尉盛房を中心に、長島には加藤氏が長島城（5）を築き拠点としたが^⑪、天正年間には新宮の堀内氏善による当地域への攻略が進行し、天正4（1576）年には長島城も落城した^⑫。これにより古代より志摩国に属した当地域も紀州の勢力下に入り、近世には紀州藩の統治を受ける事となった。

以上、周辺の遺跡の状況を中心に、道瀬遺跡に係わる地理的、歴史的状況を概観したが、以上の多くの遺跡は、学術調査を経おらず、さらに各種開発行為や自然の営力により多くは破壊や消滅の憂き目を見ている。今回調査した道瀬遺跡は海岸地に残る極めて数少ない遺跡として、また紀伊長島町内に於ける初めての本格的な発掘調査として大きな期待が寄せられる事となった。

註)

- ① 伊藤良他『海山町史』P62～P71 1984
- ② 嶋正央『奥熊野の縄文式文化』1959
- ③ 発掘調査例としては、南勢町迫間浦道瀬遺跡や熊野市津ノ森遺跡などがある。
伊藤秋男編『迫間浦道瀬遺跡』南勢町教育委員会 1976
嶋正央他『津ノ森遺跡調査概要』熊野市教育委員会 1980
嶋正央他『津ノ森遺跡発掘調査概要II』熊野市教育委員会1982 他
- ④ 関西大学文学部考古学研究室編『紀伊半島の文化史的研究——考古学編——』本文編 P521 1992
- ⑤ 『神鳳鈔』志摩国答志郡 『群書類従』巻第九
- ⑥ 伊藤良他『海山町史』 P67 1984
- ⑦ 出土埋納銭については別途報告の予定である。
- ⑧ 三重県教育委員会『三重の中世城館』 P156 1976
- ⑨ 「伊勢国西方寺別当行兼重言上」『鎌倉遺文』 13753
- ⑩ 「伊勢木本合賀嶋雑掌申状」『鎌倉遺文』 16352
- ⑪ 前掲 ⑤
- ⑫ 前掲 ⑧

Ⅲ 遺 構

今回の調査地は、海岸に沿って微高地状になる砂堆の上面に位置し、旧状は畑地であった所である。調査区内での遺構検出面の標高は最高点で5.1m、調査区の東側は堤防を挟んで砂浜の海岸線に続き、南側は集落の背後から海岸まで延びた山地の急斜面に接し、調査区内では北に向かって緩やかに傾斜していく。また、西側も調査地より低くなっていき、以前からやや湿潤な地形であった事から海跡湖が埋没したものと考えられる。

遺構の検出は、試掘調査で確認しているくすんだ黄色のやや固く締まった粗砂面まで掘削して行った。南側で地表面下約10cm、調査区北西部の最も深い所で約70cmに至る所もある。地表面から遺構検出面までは粗鬆な粗砂が堆積しており、表層部から遺物包含層までの区分はできなかった。

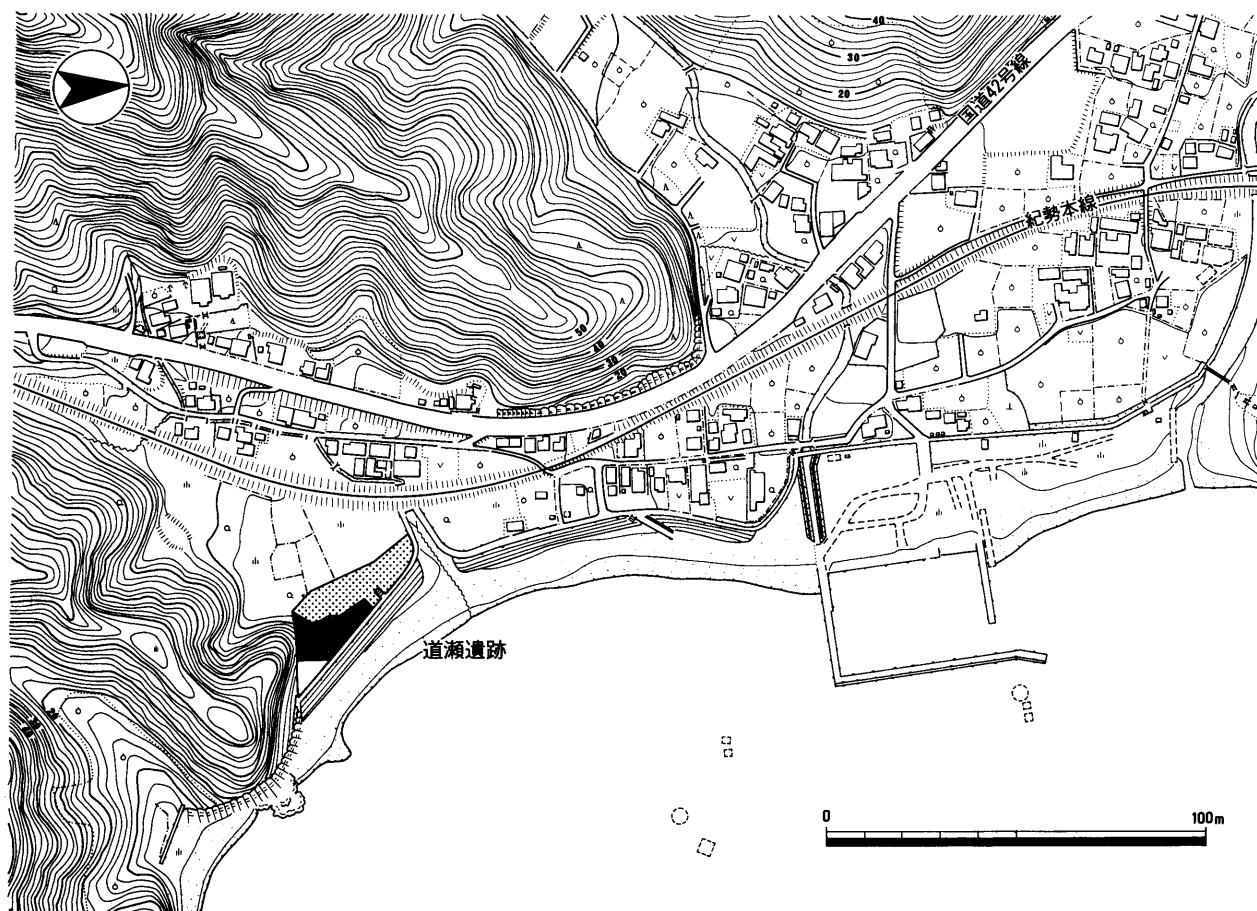
今回の調査で検出した遺構は、平安時代末期から鎌倉時代前半の製塩炉2基、炉跡1基、炭化物を埋

土に含む小穴2個である。

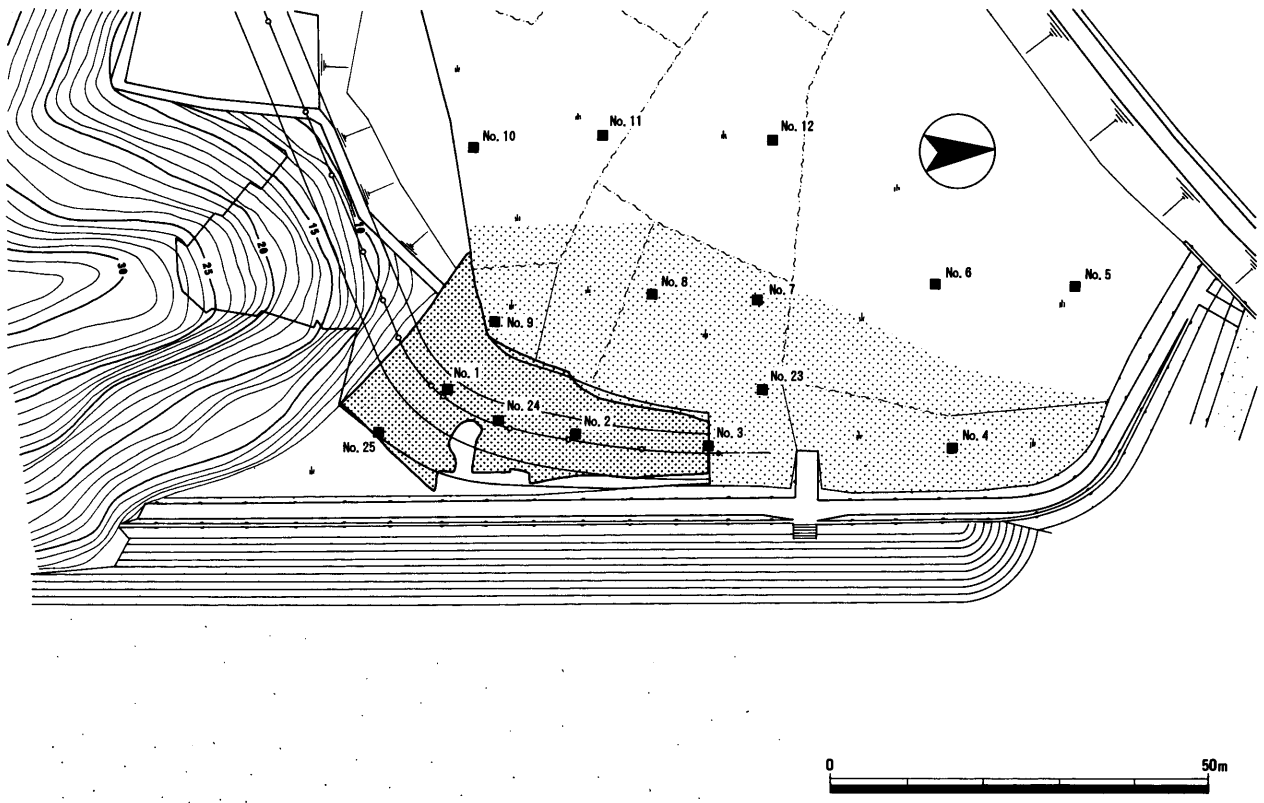
S F 1 調査区の南側で検出した炉跡である。炉跡のすぐ南側には切り立った急斜面が迫る。遺構は海食により削平された角礫混じりの黄褐色の山土上に営まれており、調査区内では安定した基盤である。

規模は、検出状況で長軸約2.0m、短軸約1.5m、深さは最大で約0.3mで平面楕円形を呈し、全体に浅い皿状で、床面でやや平坦になる。また、床面には焼成を受けた亜角礫が点在する。また、炉の西側部分で0.4m×0.2mの範囲で楕円形を呈する赤褐色の焼土面が残る。この上部に石組みなど竈状の構造も想定されるが、遺構検出面は現地表面からの深さがおよそ0.2mとわずかである事からも、遺構の上部は若干の削平を受けている可能性がある。

炉の中央部付近からはほぼ完形の陶器椀（山茶椀）が床面に食い込んで伏せられた状態で遺存していた他、埋土や上部の包含層からは南伊勢系土師器鍋の

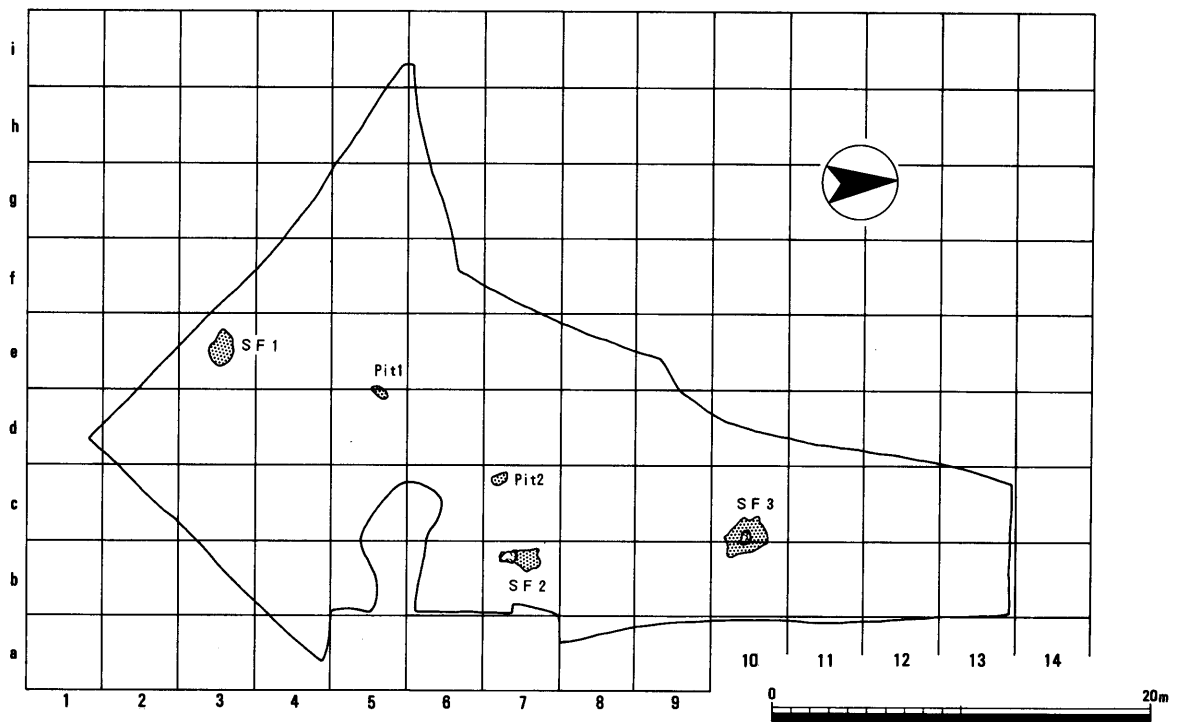


第3図 道瀬遺跡周辺地図 (1:2,000)

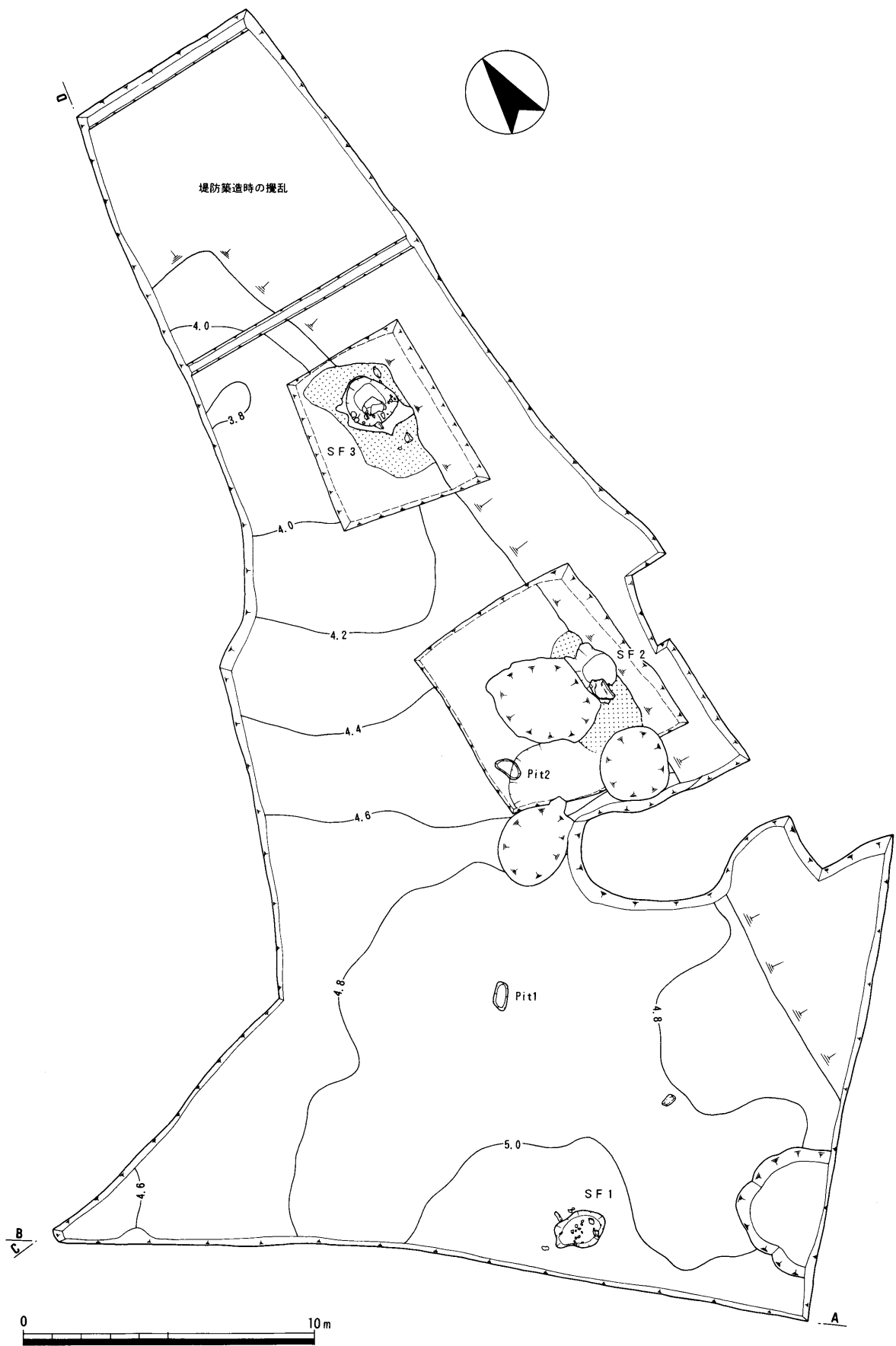


第4図 調査区位置図 (1 : 1,000)

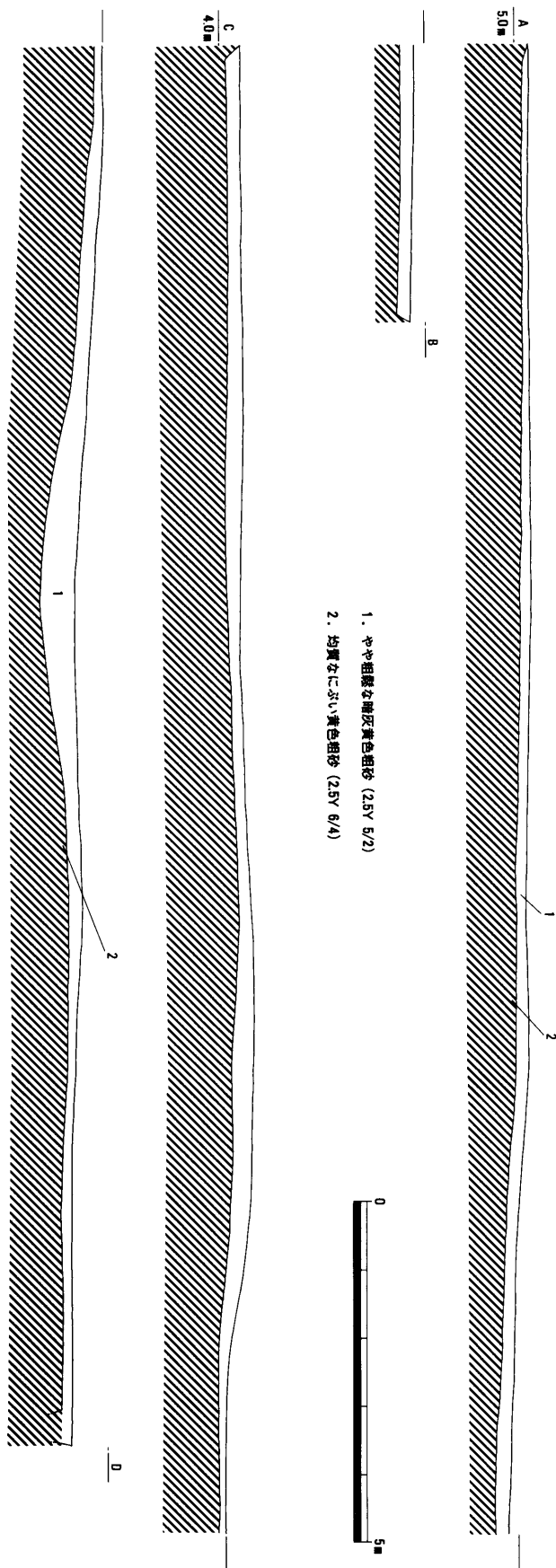
濃い網目は第1次調査区、薄い網目は遺跡範囲、黒い四角とNoは試掘坑の位置を示す。



第5図 小地区配置図 (1 : 400)



第6図 調査区平面図 (1:200)



第7図 調査区西・南壁断面図 (1:100)

破片が数個体分出土した。時期的には平安時代末から鎌倉時代前半のものと考えられる。

S F 2 今回発見した、2基の製塩炉跡のうちの1基で、調査区中央部分の海側堤防寄りの地点で検出した。東側を昭和39年頃の堤防工事に、西側も農業用の貯水施設を作るための近現代の攪乱により本来の形を損なっているものの、遺構の中央部分はかなり良好に残っていた。検出時での残存規模は、東西約1.3m、南北約2.0mである。

この製塩炉は、長軸約2.5m、短軸約2.0mほどの楕円形状の穴を砂浜に深さ0.6m以上掘りくぼめ、床及び壁に黄色粘土を貼り付け、全体的にすり鉢状に構築されている。S F 2は、床面から側壁にかけての立ち上がり部分が良好に残っており、貼り付けた粘土の最大厚で約15cm、粘土の中には床面や壁面を強化するための径1cm～3cmの角礫が混在している。また、炉の構築時のものとみられる幅2cmほどの壁面を平滑にするための工具痕がわずかにみられた。また、壁面北側では部分的に粘土が剥がれ、補修したとみられる部分もあり、特に底部では灰のかき出しのためか粘土壁が薄くなっている。

炉体内の埋土は、やや粘性をもち微細な炭化物を多量に含む黒色壤土が炉壁粘土の上に厚さ20cmほど被り、その上に多量の直径3cm～5cmの円礫と黒色土混じりの黄褐色粘質土が堆積する。下部の黒色壤土は均一ではなく、黄褐色の焼成された粘土粒が薄く広がる面をよわい間層に持っており、この炉の使用が複数回に及んだ事が窺われる。

また、この製塩炉の構造上の大きな特徴として、炉内部の南西側に置かれていた、長径約90cm、厚さ約30cmの周辺の海岸部で得られる平石がある。この石は被熱により中心まで変質しており、非常に脆く表面は一部土壌化していた。石の東側と西側は先述の攪乱により削り取られている。この平石の下部まで炭化物を含んだ黒色土がまわっており、炉壁の粘土も被熱している事から、炉の構築当初には現位置に無かったものとみられるが、支石や粘土塊などは下部にみられず、平石は空間をあけずに壁面に置かれたとみられる。この石は後述する製塩用の土製平釜(土釜)をのせる台として機能したものと考えられ、この他にも炉跡周辺には被熱により赤化した人

頭大前後の礫が散在していた。

炉の底部から壁面の上部にかけて、黄～赤～青灰色と変色、固化し、特に北東部分の平石と反対側の壁面が著しく青灰色に変色しており、これらの状況から海側（北東側）から山側（南西側）に向かって火が焚かれたようである。

炉跡周辺の砂も、製塩に伴う焼成によって鮮やかな赤色に変色し、かなりの高温によって製塩が行われた事が窺われる。また、炉跡を中心に径約5mの範囲に炭化物を含んだ黒色の粗砂が広がっている。

埋土や炉壁粘土からの出土遺物はないが、土釜の破片が周辺の包含層に散在しており、SF2に伴うものと考えられる。

SF3 調査区の北部でSF2から約12m離れたところで検出された製塩炉跡である。これも東側を海岸堤防の工事に、西側を試掘坑と倒木により攪乱を受けているが、SF2よりも平面形上の遺存度は良い。平面形は大略楕円形を呈しており、一部突出した部分も炉の側壁等の崩落・流失によるものとみられる。検出規模は、東西約2.5m、南北約1.8m、残

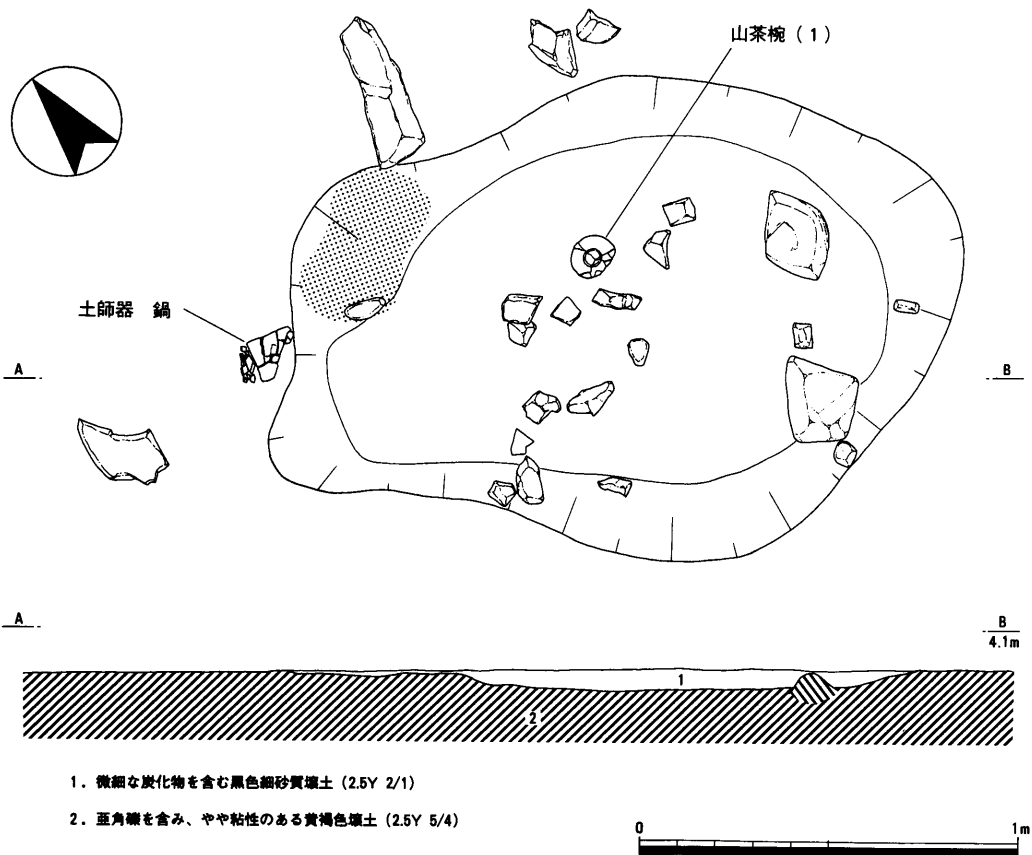
存深約0.4mである。

SF3もまた、掘りくぼめた砂浜に黄色粘土により構築されており、粘土の厚みは最大で約10cmほどあり、やはり1cm～3cmの角礫が混在している。

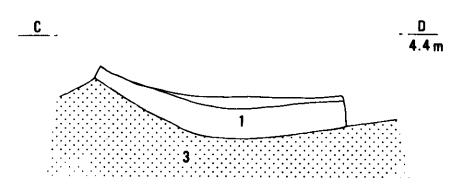
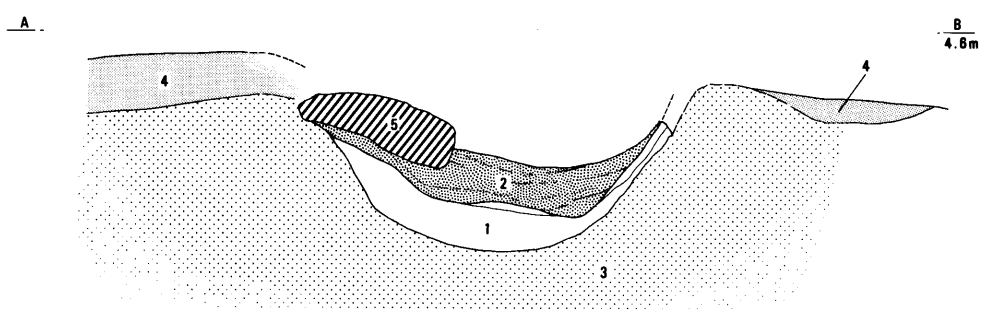
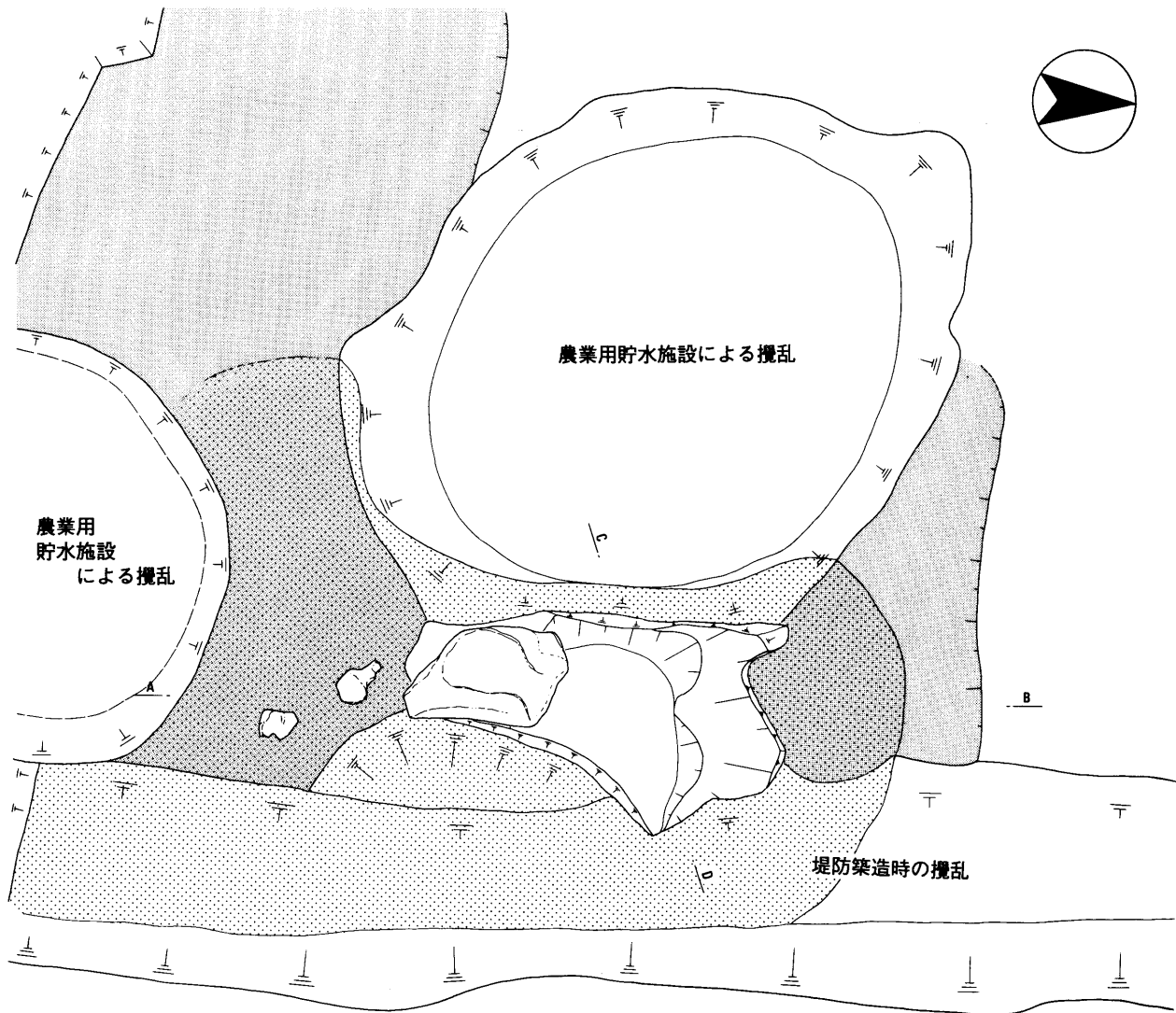
炉跡の埋土は、上面に直径3cm前後の円礫が、その下層に微細な炭化物が多量に混在する黒褐色土がある。炉跡の床面から壁面にかけて粘土の表面が赤色～青灰色～白色に変色しており、SF3もまた、強い火力で複数回の焼成を経ている事が窺われる。

炉跡の内部には、南西側で壁に密着して南北約50cm、東西約70cmの平石が据えられている。使用する石材はSF2と同様であり、埋土の黒色土が下部までまわり込んでいる点もSF2と同様である。やはり被熱により非常に脆弱化しており、燃烧部とみられる炉内北東部分に面して、石の表面に煤状の黒色物が付着している。やはり、土釜などの台として機能したと考えられる。炉跡の周辺の砂浜上からはこの土釜の破片が多量に出土している。

SF3からの出土遺物としてはこの他に、炉体粘土内から陶器小皿（山皿）が2個体分出土しており



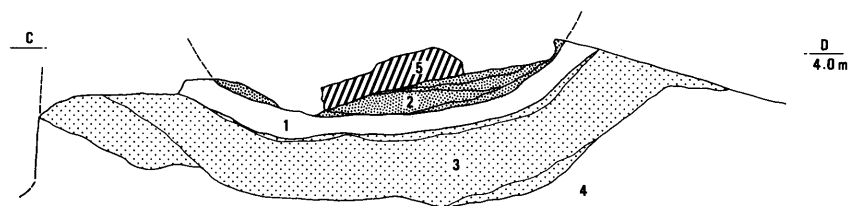
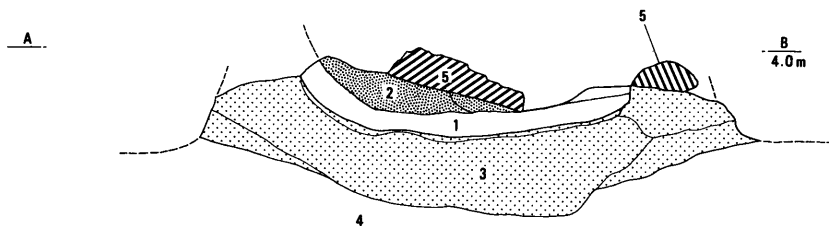
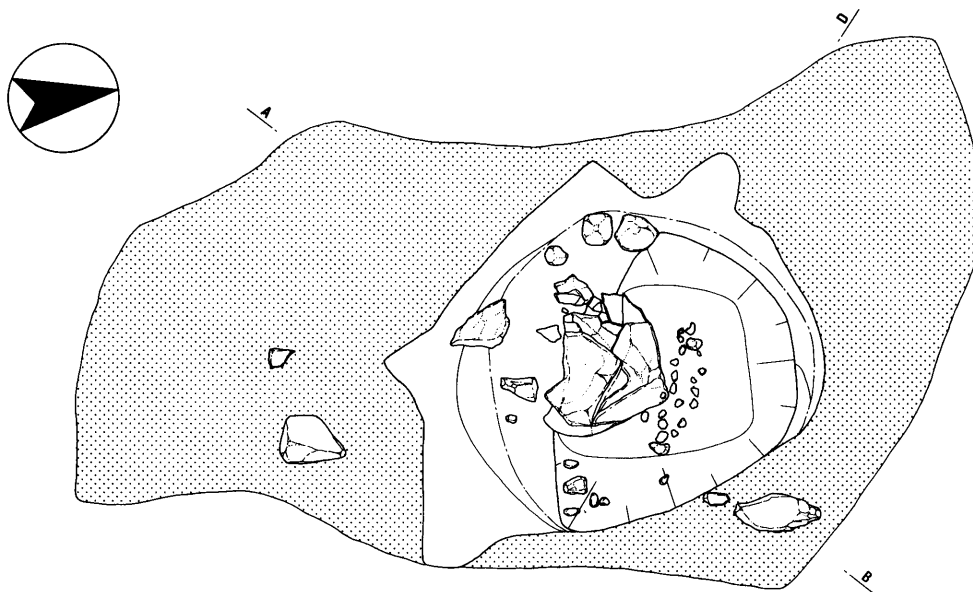
第8図 SF1実測図 (1:40)



1. ϕ 1mm~3mmの小礫を含み、被熱により赤化・固化した赤色埴土 (10YR 4/6)
2. 微細な炭化物や ϕ 3cm~5cmの円礫を多量に含む黒褐色中砂質埴土 (2.5Y 3/1)
3. 均質な赤褐色粗砂 (10YR 4/4)
4. 微細な炭化物を含む黒色中砂質埴土 (2.5Y 2/1)
5. 平石



第9図 SF2実測図 (1:40)



1. ϕ 1mm~3mmの小礫を含み、被熱により赤化・固化した橙色壤土 (2.5YR 7/8)
2. 微細な炭化物を含み、やや粘性のある灰白色中砂質壤土 (5Y 8/2)
3. 均質な赤褐色砂 (10YR 6/8)
4. 均質になぶい黄色粗砂 (2.5Y 6/4)
5. 平石



第10図 SF 3 実測図 (1:40)

(2, 3)、この事から製塩炉跡の構築は平安時代末葉から鎌倉時代前半のものと考えられる。SF2とは構造や規模の上でも差異がなく、積極的に時期差を想定する事はできず、相互の位置関係からもほぼ同時に操業していた可能性が高い。

以上、2基の製塩炉を検出したが、海岸の風や波の作用により、遺構検出の段階では遺存する粘土築成の炉体の上面にまで周辺の赤化した砂が被っており、炉体の上部では明確な地層面により検出する事ができなかった。これは包含層が分離できなかった事とも関連するが、結果的には調査区全体では便宜的に遺構検出面といたくすんだ黄色でやや固結度の高い粗砂面より5cm~10cm下のレベルで炉体を検出している。特にSF2は、東西両側を後世の攪乱で損なわれ、平面観で2分の1程度しか残っておらず、周囲の赤化した砂をかなり取り除いてからの炉体の検出になってしまった。今後、同類の遺構を調査す

る際の反省・課題である。

また、炉の上部構造についても、周辺で柱穴などを検出できず、覆い屋的なものがあったかどうかは現状では全く不明である。

Pit1 SF1から北側へ緩やかに傾斜する地点で検出した小穴で、規模は長径約90cm、短径約50cm、深さ約20cmの楕円形を呈する。埋土は炭化物を含む粗砂で、SF2の周囲に広がる黒色粗砂と同様のものである。土師器の小片が数点出土したものの、遺構の時期は不明である。

Pit2 Pit1からさらに北側の、調査区中央部付近の緩やかな傾斜面に位置する小穴である。規模は長径約90cm、短径約60cm、深さ約10cmの楕円形を呈し、埋土はPit1同様に黒色の炭化物を含む粗砂である。出土遺物は土師器小片のみで、やはり時期は断定できない。

IV 遺物

今回の発掘調査では、整理用コンテナにして10箱の遺物が出土した。大半は弥生時代末期~中世前期の土器・陶磁器類で、加工痕のある円礫などの石製品が若干含まれる。また、遺構の少なさもあり、ほとんどは遺構検出面上の砂層からの出土であり、本報告では包含層出土として扱っている。

1. 遺構出土遺物(1~3)

1) SF1出土遺物(1)

僅かにくぼんだ炉体の埋土内やその上面から南伊勢系の土師器鍋の破片が複数個体分出土したが、接合・図化する事はできなかった。山茶碗(1)は、炉体内に伏せた状態で出土し、渥美型のⅢ期の古い段階、13世紀前半のものとみられる。

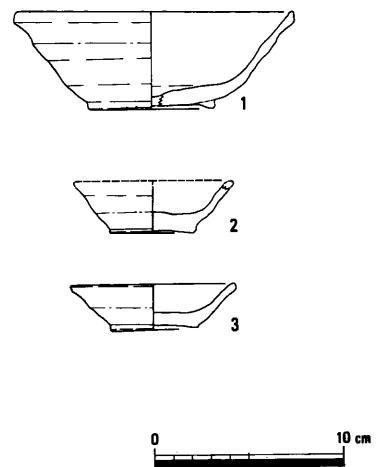
2) SF3出土遺物(2,3)

炉体を構成する粘土内から山皿が2個体分出土している(2,3)。いずれも焼けて固結した粘土がこびりついており、(2)は被熱によるとみられる亀裂が底部を貫通している。いずれも明瞭な高台を持たないが、小碗状の形状を残しており、渥美型のⅡ期に属するものとみられ、12世紀後半~13世紀前半のものと考えられる。

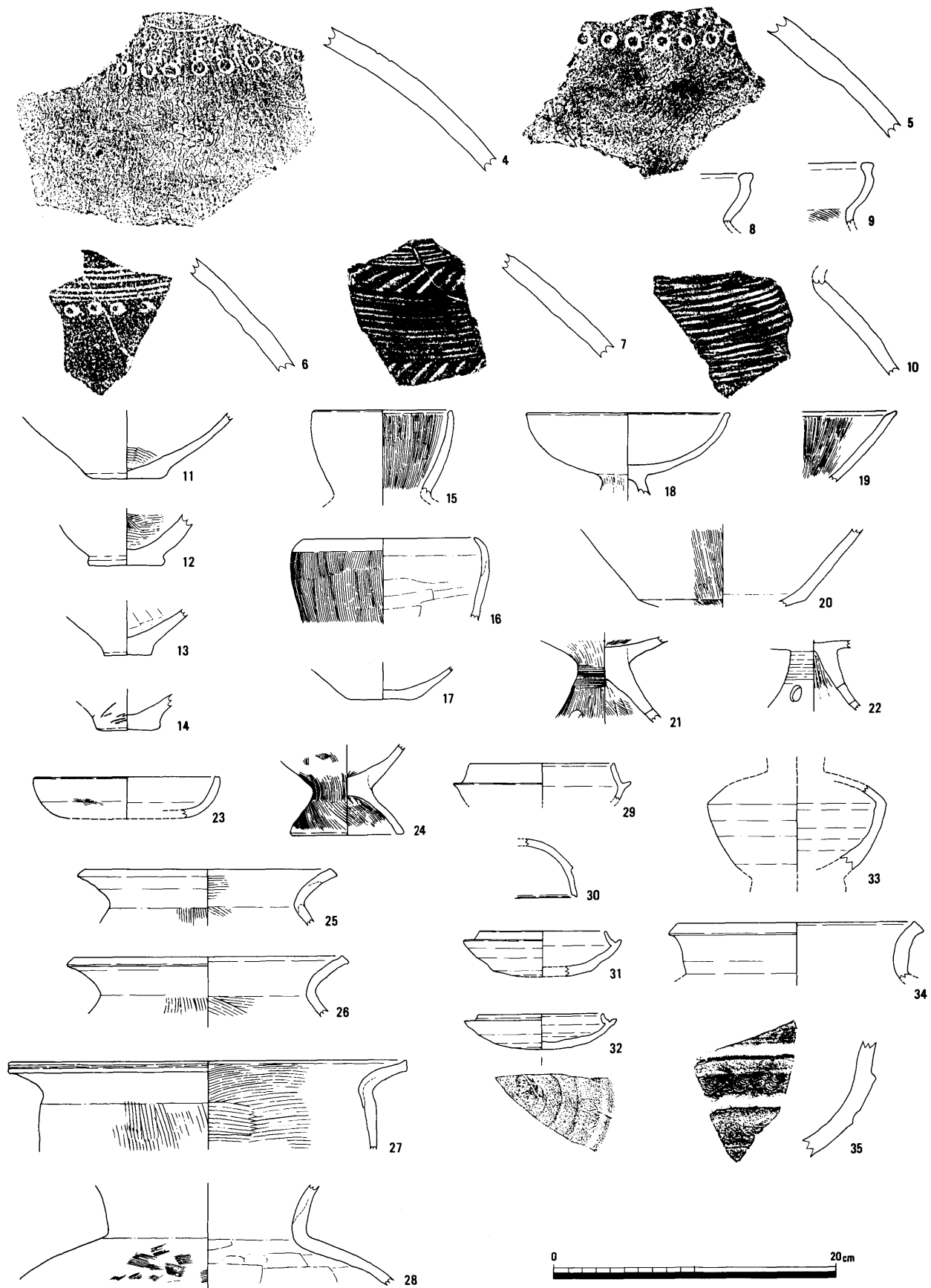
2. 包含層出土遺物

1) 弥生時代~古墳時代の遺物(4~30, 35)

最も古い資料とみられるものは受け口状になる細頸壺(8,9)で、胎土に砂粒を多量に含み、口縁端部外面に凹線文を施す弥生時代中期のものとみられるが、この時期の資料は極めてわずかである。弥



第11図 道瀬遺跡本調査(第1次)遺構出土遺物実測図(1:4)



第12図 道瀬遺跡本調査（第1次）包含層出土遺物実測図1（1：4、1：2）
4～7、10、35は1：2、他はすべて1：4

生時代後期後葉～古墳時代初頭になると遺物の出土量も増し、東海的要素と畿内の要素がそれぞれみられる。東海系と考えられるものでは、各々同一個体の壺肩部（4，5）と（6，7）、「ヒサゴ型」と呼ばれる内弯口頸壺（15，16）、杯下半部に稜を持つ高杯（19，22）などがあり、尾張地方の廻間Ⅱ式に併行する段階のものである。畿内系では細長い原体が特徴的な叩き目を持つ甕（10）がある。古墳時代中期以降の遺物では土師器甕類（24～27）や各種須恵器類がある。（24）は脚台部内面の折り返しはみられないが、東海系の所謂「宇田型」の台付甕であろう。須恵器では陶邑編年のTK47型式前後のものがみられる。（35）は器台の杯部片で断面三角形の突帯の間に細かい波状文を施す。

2) 飛鳥時代～奈良時代の遺物（31～34）

須恵器類と、図化できなかったが土師器片がある。須恵器杯は型式的には陶邑編年のTK209～TK217型式の範疇に含まれ、7世紀代のものとみられる。（39）の底部外面にはヘラ記号がみられる。（34）は甕の口頸部、（33）は台付長頸瓶の胴部片で、（33）の口頸部の接合状況は不明だが、いずれも奈良時代のものと思われる。

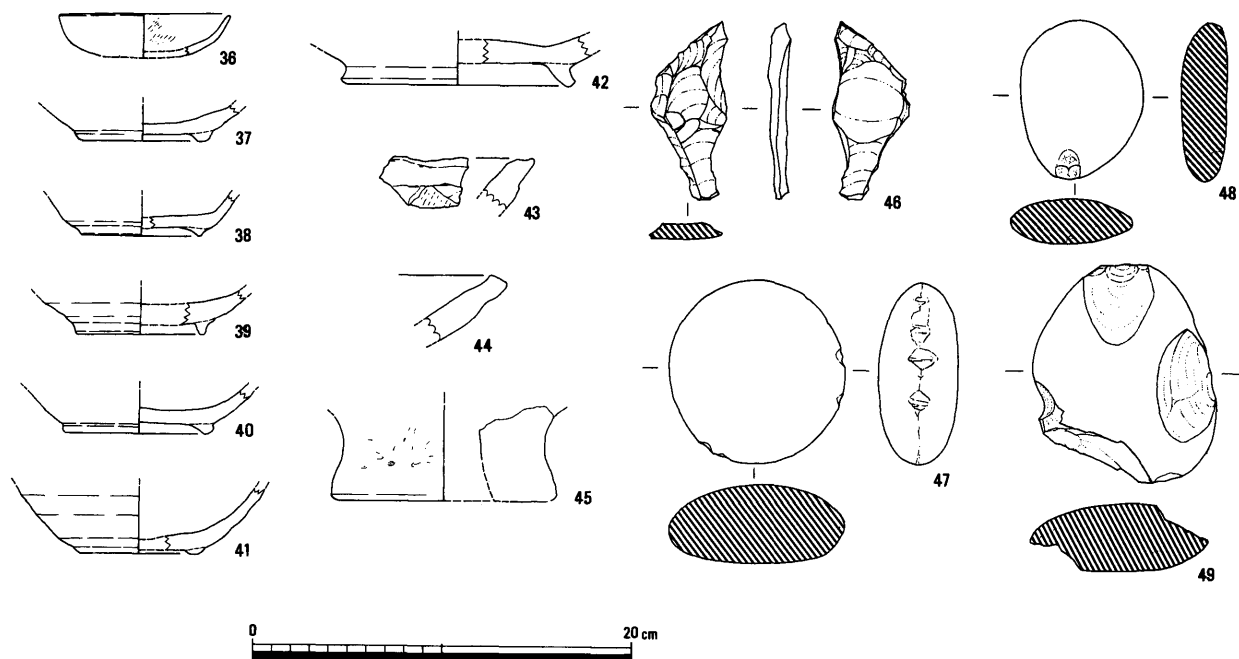
3) 平安時代末～鎌倉時代の遺物（36～45）

土師器皿（36）、山茶碗類（37～42）、製塩用土製平釜（土釜、43～45）がある。山茶碗は渥美型のもの

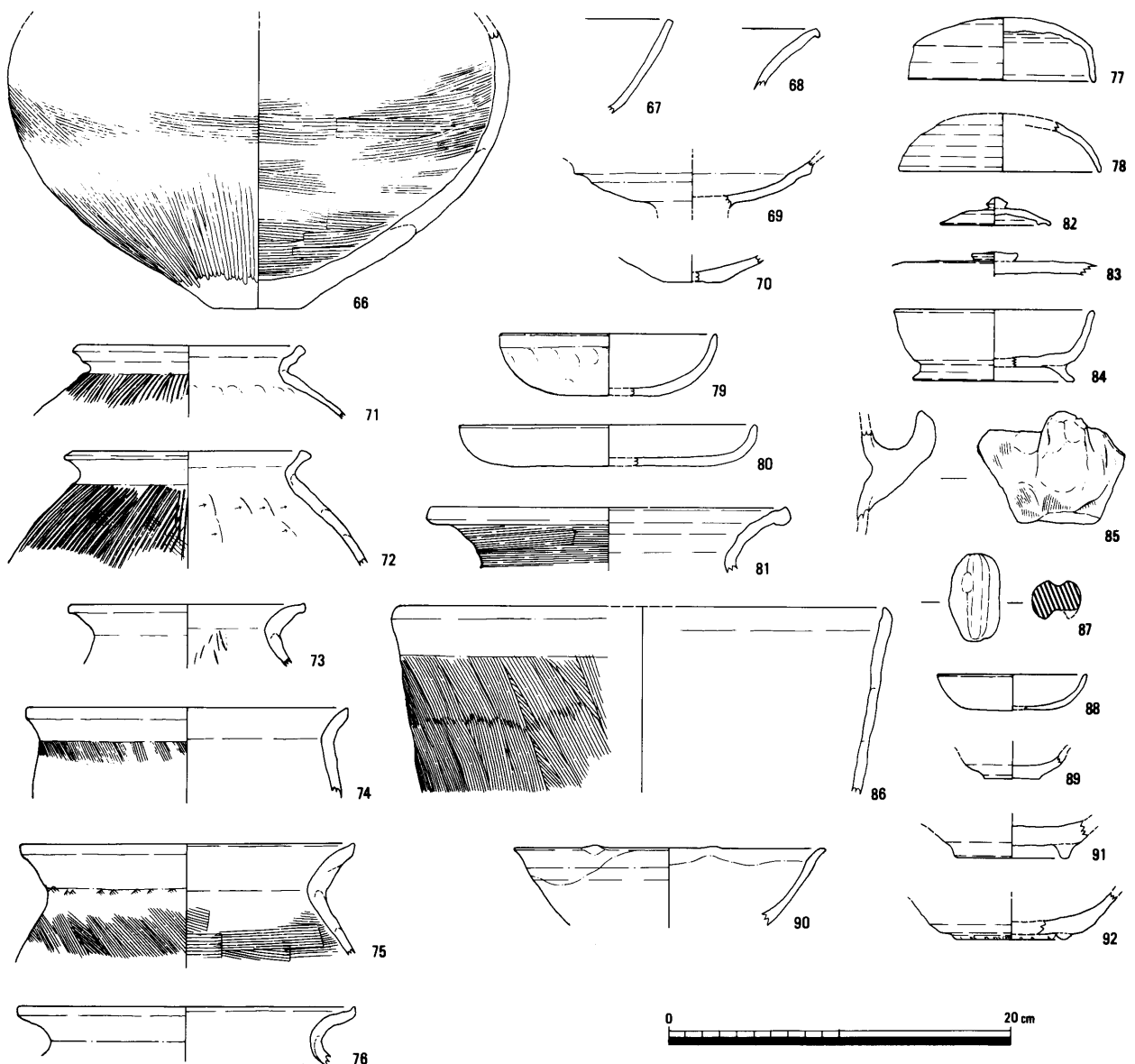
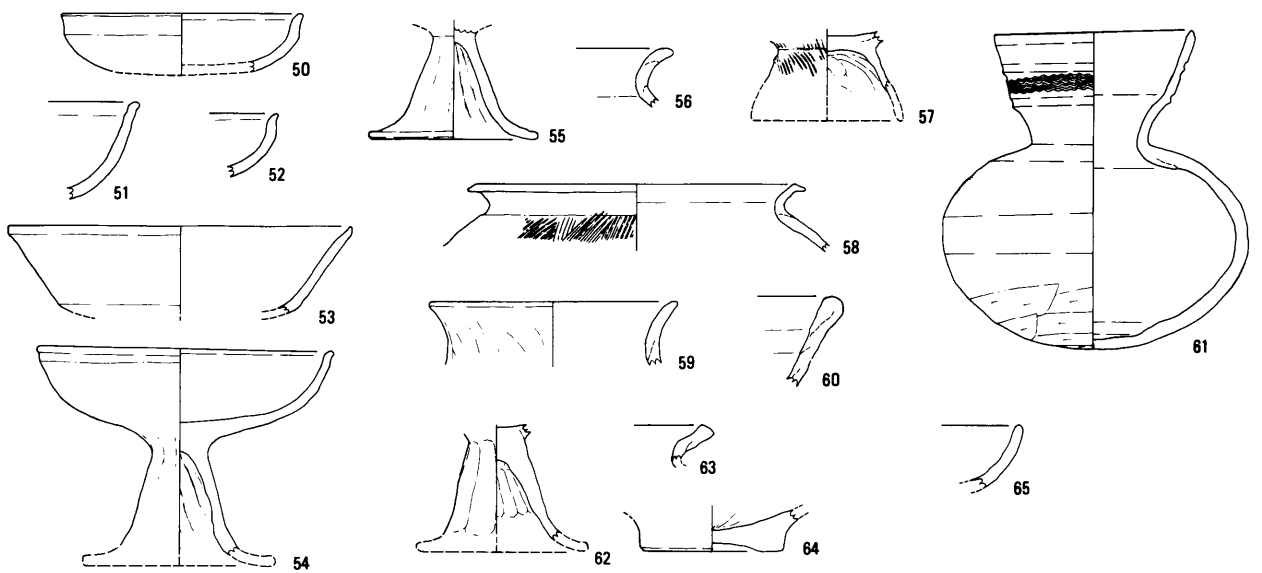
ので、Ⅲ期の第1～第2小期の範疇のものが多く、現在の年代観で13世紀代に属する。

製塩用土製平釜（土釜）の年代観は確立していない。詳細については次章において後述するが、今回検出した製塩炉に伴うとみられ、12世紀後葉～13世紀前半のものと考えられる。土釜は全て破碎した状況で出土しており、接合する資料もほとんど無い。そのため今回出土した資料からは復元により全体形を窺い知る事はできない。

細部についてみると、体部で器壁の厚みが2cm～3cm程度あり、胎土には砂粒や径1mm～3mm程度の小石を多量に含み、ワラなどの繊維痕も見られる。器表面は雑なナデ調整が施され、内面についても、他地域で出土する製塩土器でいわれるように、特に平滑に仕上げるという意図は窺われない。（43）と（44）は口縁部片でいずれも端面を持つが意図的なものではなく、成形の最終段階で強くヨコナデされたためきたものである。また（45）は数少ない底部片とみられるが、推定底径は約11cmである。底面の調整は不明である。破断面を観察すると、粘土塊からそのまま成形している事が窺われ、この部分については粘土紐巻き上げの手法を取らないものとみられる。しかし体部片については破碎の度合いが大きいためはっきりしないが、板状で方形に近い破片が多い。このタイプの土釜については、かつて湊章治

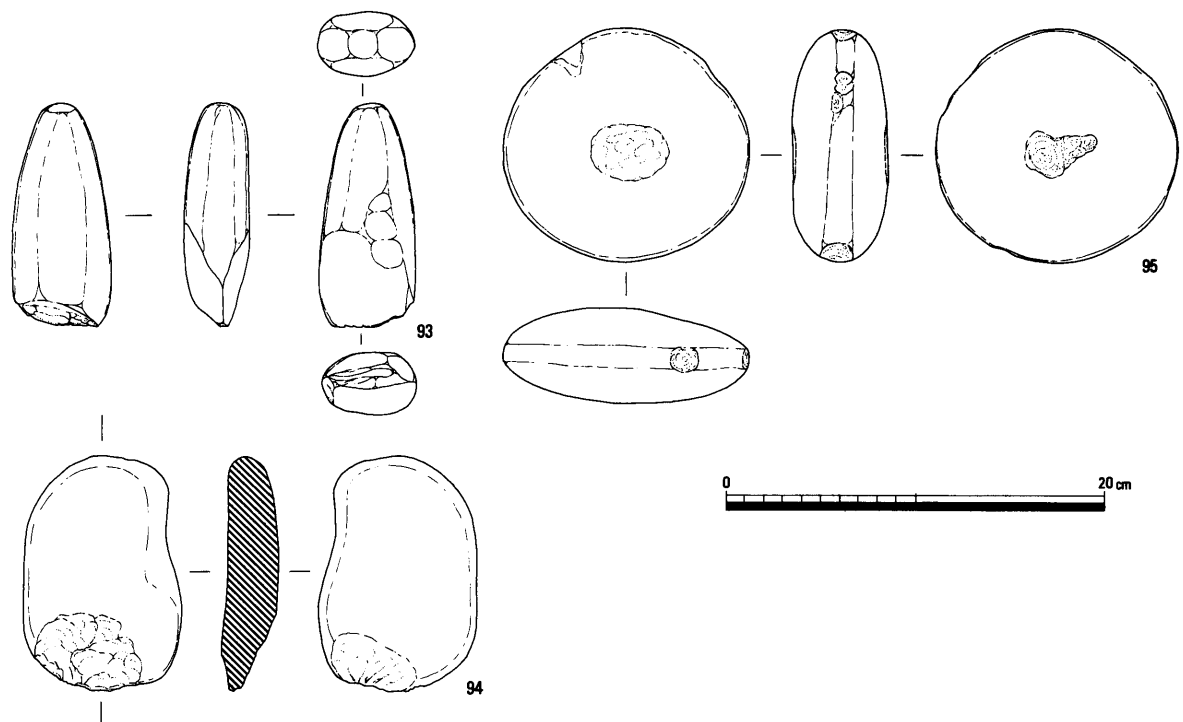


第13図 道瀬遺跡本調査（第1次）包含層出土遺物実測図2（1：4、1：2）
46のみ1：2、他はすべて1：4



第14図 道瀬遺跡出土遺物実測図 (試掘調査・資料館蔵 1:4)

50~65: 試掘調査出土 66~92: 資料館蔵



第15図 道瀬遺跡出土遺物実測図（資料館蔵 1：4）

氏・伊藤良氏が紀伊長島町城ノ浜遺跡から出土した資料から復元をこころみ、直径約80cm程度の糸尻底を持つ大きな杯形のを想定しているが、道瀬遺跡からもそれを大きく否定する資料は出土しておらず、法量はともかく形態的には矛盾しない。

器表面の状態は、二次的な被熱により赤化しているとみられる破片はあるものの、明瞭にススや炭化物が付着したものはなく、また製塩土器一般にいわれるような海水から塩分を析出する際に生じる付着物も一部に可能性はあるものの明確ではない。遺物の肉眼観察のみでは、鹹水の煎熬に使用したのか、精製塩を作る際に使用したのかは判断することはできない。

4) 時期不明の遺物 (46~49)

石製品がある。(46)は安山岩系のフレイクで、刃部の形成はみられない。(47~49)は、周辺の海岸部で採集される砂岩系の円礫を用いた敲打器で、側縁部に敲打痕がつくもの(49)や、側縁でも長軸側に敲打痕が残り、チョッパー状になるものがある。同じような「打製」石器は近辺では南勢町の迫間浦道瀬遺跡や磯部町東海道遺跡でも報告されている。い

ずれにしても、一般に石器使用される石材ではない点が共通する。

3. 試掘調査出土の遺物 (50~65)

古墳時代および鎌倉時代の遺物を中心に出土しており、今回の調査区から外れるものの、特に試掘坑No.4からの出土量が多い。

古墳時代の遺物では、土師器については高杯や台付甕(57, 58)など東海系の優勢が伺われる。しかし須恵器については(61)のように陶邑編年でTK208型式のものとみられる畿内系の資料も出土している。古墳時代の遺構は今回の調査では発見されていないが、今回の調査区から北や北東に向かって砂丘が続いており、この部分で遺構が存在する可能性はある。

鎌倉時代の遺物には山茶碗片の他、土製平釜片がある。(60)はその口縁部片だが、先述した本調査出土資料とはタイプが異なり、胎土に小石や繊維質は含まれず、砂質分が多い。色調も橙色系で、口縁端部を丸く納める形状である。また図化していないが、体部片では外面に粗いハケメ状の調整を施すものがあり、時間的な併行あるいは前後関係は明らかでは

第1表 道瀬遺跡出土遺物（土器類）観察表

- ・番号は、本書遺物実測図番号と一致する。
- ・器種の項では、それぞれ「～形土器」の表現を省略した。
- ・法量の口径は、口縁端部の最高点を結んだ長さを示す。
- ・色調は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』（1988年版）を参照した。
- ・登録番号は、遺物と図面の整理及び管理上の番号で、実測された遺物すべてに通して付されている。

番号	登録	遺構・層位	器種	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	008-01	4-e SF1埋土	陶器碗 (山茶碗)	口径：14.5cm 器高：5.3cm 高台径：6.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部回転系切痕、貼付高台	微細な砂粒多量に含むが密	良	外：灰白 5Y 7/1 内：〃	全体の約50%	高台に初殺圧痕
2	007-04	10-c SF3炉体	陶器小皿 (山皿)	口径：8.6cm 器高：2.4cm 底径：4.7cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕	微細な砂粒多量に含むが密	良	外：灰白 2.5Y 3/1 内：〃	全体の約70%	口縁部に薄く自然釉かかり、底部に亀裂が貫通している
3	007-05	10-c SF3炉体	陶器小皿 (山皿)	残高：2.6cm 底径：4.5cm	体部ロクロナデ、底部糸切後ナデか？	微細な砂粒多量に含むが密	良	外：灰白 N 8/ 内：〃	全体の約60%	内面に自然釉がゴマメ状に付着
4	006-07	不明 包含層？	弥生土器 壺	————	表面にハケ、肩部に横線文と竹管文	φ 0.1mm～0.3mmの砂粒含みやや粗	良	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内：〃	————	5と同一個体
5	006-08	6-g 包含層	弥生土器 壺	————	表面にハケ、肩部に竹管文	φ 0.1mm程度の砂粒を僅かに含みやや粗	並	外：灰黄褐 10YR 5/2 内：〃	————	4と同一個体
6	002-07	3-d 包含層	弥生土器 壺	————	肩部擲描横線文・竹管文	やや粗	並	外：浅黄橙 10YR 8/3 内：〃	————	
7	002-07	3-d 包含層	弥生土器 壺	————	肩部に擲描横線文・連続刺突文	やや粗	並	外：浅黄橙 10YR 8/3 内：〃	————	
8	004-02	不明 包含層？	弥生土器 壺	————	口縁部ヨコナデ、凹線文	φ 0.1mm程度の砂粒を含むが密	並	外：にぶい黄橙 10YR 6/4 内：〃	————	9と同一個体
9	005-03	6-f 包含層	弥生土器 壺	————	口縁部ヨコナデ、凹線文に連続キザミ目	φ 0.1mm程度の砂粒を含むが密	並	外：にぶい黄橙 10YR 6/4 内：〃	————	8と同一個体
10	002-06	10-b 攪乱層	土師器 甕	————	外面細いタタキ目、内面ナデ	密	並	外：にぶい赤褐 5YR 5/3 内：にぶい橙 5YR 6/4	————	
11	001-03	6-e 包含層	土師器？ 壺	残高：5.0cm 底径：4.8cm	内面ハケ、外面ミガキか？	φ 1mm～の砂粒等含みやや粗	並	外：にぶい褐 7.5YR 6/3 内：灰黄褐 10YR 6/2	————	底部のみ残
12	004-03	3-d 包含層	土師器 壺	残高：3.6cm 底径：5.5cm	内面ハケ、外面ナデ	φ 0.1mm～0.2mmの砂粒を僅かに含みやや粗	並	外：橙 5YR 7/8 内：〃	————	底径の1/4
13	005-02	7-e 包含層	土師器 壺	残高：3.2cm 底径：3.5cm	内面ヘラケズリ、外面ナデ	φ 0.1mm程度の砂粒を僅かに含みやや粗	並	外：にぶい黄褐 10YR 5/3 内：〃	————	底径の1/3
14	001-07	5-g 包含層	弥生土器？ 甕	残高：2.6cm 底径：4.0cm	外面タタキ目、内面ナデ	φ 0.1mm以下の微細な砂粒含みやや粗	並	外：にぶい橙 5YR 6/4 内：〃	————	底径の1/2強
15	004-05	6-f 包含層	土師器 壺	口径：9.8cm 残高：6.2cm	外面ヘラミガキ、ナデか？内面ヘラミガキ	微細な砂粒含むが密	並	外：橙 5YR 6/8 内：〃	————	口径の1/3 器表面が磨耗
16	007-03	6-c SF2 黒色土	土師器 壺	口径：12.2cm 残高：5.9cm	外面ハケ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	微細な砂粒含みやや粗	並	外：浅黄橙 10YR 8/3 内：灰白 2.5Y 8/2	————	口径の1/8
17	007-08	6-g 包含層	土師器 壺	残高：2.4cm 底径：3.8cm	ヘラミガキか？	φ 0.1mm～0.2mmの砂粒含みやや粗	並	外：にぶい橙 7.5YR 7/4 内：〃	————	底径の1/3 器表面磨耗のため、調整不明
18	001-05	8-c 包含層	土師器 高杯	口径：14.2cm 残高：6.0cm	口縁部ヨコナデ	密	並	外：橙 5YR 6/6 内：〃	————	口径の1/4 器表面磨耗のため、調整不明
19	005-01	2-e 包含層	土師器 高杯	残高：5.0cm	内外面ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ	緻密	良	外：橙 7.5YR 7/6 内：〃	————	20と同一個体か？
20	001-04	3-b 包含層	土師器 高杯	残高：5.5cm	内外面ヘラミガキ	緻密	良	外：橙 2.5YR 6/6 内：〃	————	19と同一個体か？
21	004-06	3-e 包含層	土師器 高杯	残高：6.1cm	外面ヘラミガキ、脚部内面ハケ、外面擲描横線文	密	良	外：にぶい橙 7.5YR 6/4 内：〃	————	
22	007-06	6-g 包含層	土師器 高杯	残高：5.9cm	外面ナデ・擲描横線文、内面シボリ痕	微細な砂粒多量に含むが密	良	外：にぶい褐 7.5YR 5/3 内：〃	————	
23	001-01	5-c 包含層	土師器 杯(皿?)	口径：13.0cm 器高：2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリ後ナデ	密	並	外：灰黄褐 10YR 6/2 内：〃	————	口径の1/4 底部外面に黒色物付着
24	009-04	6-g 包含層	土師器 台付甕	脚台径：7.8cm 残高：6.5cm	内外面ハケ	微細な砂粒多量に含むが密	良	外：にぶい褐 7.5YR 5/4 内：〃	————	脚台部のみ残
25	009-02	7-e 包含層	土師器 甕	口径：17.3cm 残高：4.0cm	口縁部ヨコナデ、内面・体部外面ハケ	微細な砂粒多量に含むが密	並	外：灰黄褐 10YR 4/2 内：にぶい黄橙 10YR 6/4	————	口径の1/4 外面にスス付着
26	006-02	5-d 包含層	土師器 甕	口径：19.0cm 残高：4.0cm	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ	φ 0.1mm程度の砂粒多量に含むが密	並	外：にぶい黄褐 10YR 5/3 内：にぶい黄橙 10YR 7/4	————	口径の1/4 外面にスス付着

番号	登録	遺構・層位	器種	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
27	007-01	5-c 包含層	土師器 甕	口径: 28.0cm 残高: 6.3cm	口縁外面ヨコナデ、体部 外面・内面ハケ	φ 0.1mm~0.2mm の砂粒多量に含 みや粗	並	外: ぶい橙 7.5YR 7/4 内: *	口径の1/8	
28	007-02	6-c SF2 黒色土	土師器 壺	残高: 7.3cm	頸部ナデ、体部外面細か いハケ、内面ケズリ	微細な砂粒含む が密	並	外: 淡黄 2.5Y 8/3 内: *	——	
29	005-06	7-b 攪乱土	須恵器 杯	口径: 10.2cm 残高: 2.7cm	体部ロクロナデ	密	良	外: 灰 5Y 6/1 内: *	口径の1/8	
30	005-07	調査区南端 トレンチ内	須恵器 杯蓋	残高: 4.3cm	体部ロクロナデ、天井部 ロクロケズリ	密	良	外: 灰 N 6/ 内: *	——	
31	001-06	3-b 包含層	須恵器 杯身	口径: 8.8cm 残高: 3.2cm	体部ロクロナデ、底部外 面ロクロケズリ	密	良	外: 灰黄 2.5Y 6/2 内: *	口径の1/4	
32	009-01	5-d 包含層	須恵器 杯身	口径: 8.9cm 残高: 2.5cm	体部ロクロナデ、底部外 面ロクロケズリ	密	良	外: 灰黄 2.5Y 6/2 内: *	口径の1/4	底部外面にへ ラ記号
33	001-02	3-b 包含層	須恵器 長頸瓶	残高: 6.0cm	体部外面ロクロケズリ、 内面ロクロナデ	微細な砂粒多量 に含むが密	良	内外: 灰黄 2.5Y 7/2 釉: 暗オリブ 5Y 4/3	——	体部肩部に自然 釉
34	006-01	8-a 包含層	須恵器 甕	口径: 16.7cm 残高: 3.8cm	内外面ロクロナデ	密	良	内外: 灰 7.5Y 6/1 釉: 灰オリブ 7.5Y 5/2	口径の1/8	内外面にうす く自然釉付着
35	007-07	10-c SF3 炉体	須恵器 器台	——	体部ロクロナデ、外部下 端ロクロケズリ、櫛描波 状文	密	良	外: 灰白 N 7/ 内: *	——	
36	005-04	5-c 包含層	土師器 小皿	口径: 8.8cm 残高: 2.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ、内面ハケ?	φ 0.1mmの砂粒 を僅かに含みや 粗	並	外: ぶい黄橙 10YR 7/4 内: *	口径の1/8	
37	004-01	8-b 包含層	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 6.2cm 残高: 2.0cm	体部ロクロナデ、底部糸 切痕、貼付高台	φ 0.1mm~0.2mm の砂粒多量に含 みや粗	良	外: 灰 5Y 5/1 内: *	高台径の 1/3	高台に粗穀圧痕
38	002-04	9-c 包含層	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 6.6cm 残高: 2.3cm	体部ロクロナデ、底部糸 切痕、貼付高台	密	並	外: 灰白 10YR 7/1 内: *	高台径の 1/4	高台に粗穀圧痕
39	002-03	5-c 包含層	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 6.6cm 残高: 2.4cm	体部ロクロナデ、底部糸 切痕、貼付高台	密	並	外: 灰白 2.5Y 8/2 内: *	高台径の 1/4	高台に粗穀圧痕
40	005-08	不明 包含層	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 7.5cm 残高: 2.2cm	体部ロクロナデ、底部糸 切痕、貼付高台	φ 0.1mm~0.2mm 程度の砂粒を多 量に含む	良	外: 灰黄 2.5Y 6/2 内: *	高台径の 2/3	高台に粗穀圧痕
41	002-01	6-c 包含層	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 6.1cm 残高: 3.5cm	体部ロクロナデ、底部糸 切痕、貼付高台	密	良	外: ぶい黄橙 10YR 7/2 内: 灰黄褐 10YR 6/2	高台径の 1/3	高台に粗穀圧痕
42	002-02	7-c 包含層	陶器 台付鉢	高台径: 11.5cm 残高: 2.7cm	体部ロクロナデ、底部へ ラ切り、貼付高台	φ 3mm程度の小 石含むが密	並	外: 灰白 2.5Y 7/1 内: *	高台径の 1/7	
43	002-08	10-c 試掘坑埋土	製塩用 土製平釜	——	口縁部ヨコナデ	微細な砂粒を多 量に含むが密	良	外: 橙 5YR 6/6 内: *	——	土師質 二次焼成による 赤化
44	005-05	5-c 包含層	製塩用 土製平釜	——	口縁部ヨコナデ、体部 へラケズリ?	微細な砂粒含む が密	並	外: 明赤褐 5YR 5/8 内: *	——	土師質 二次焼成による 赤化
45	006-04	8-a 包含層	製塩用 土製平釜	底径: 11.1cm 残高: 5.1cm	体部表面へラケズリ? 底部無調整	微細な砂粒を僅 かに含みや粗	並	外: 橙 2.5YR 6/6 内: *	——	土師質 二次焼成による 赤化
50	011-03	試掘坑 No.4	土師器 杯	口径: 12.6cm 残高: 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良	外: ぶい褐 7.5YR 5/3 内: ぶい橙 7.5YR 6/4	口径の 1/6強	外面にわずかに 黒色物付着
51	010-06	試掘坑 No.4	土師器 杯	残高: 5.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	φ 2mm程度の長 石粒含むが密	堅緻	外: 明赤褐 2.5YR 5/6 内: *	口径の 1/8弱	
52	010-07	試掘坑 No.4	土師器 杯	残高: 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良	外: 褐 7.5YR 4/3 内: 明褐 7.5YR 5/6	口径の1/7	
53	011-06	試掘坑 No.4	土師器 高杯	口径: 18.0cm 残高: 4.6cm	口縁部ヨコナデ、杯体部 ナデ	微細な砂粒を多 量に含む	やや軟質	外: ぶい黄橙 10YR 7/4 内: *	杯部口径 の1/4	器表面の磨耗 著しい
54	010-05	試掘坑 No.4	土師器 高杯	口径: 15.4cm 残高: 11.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ、脚部外面ナデ、内面 ナデ・シボリ	微細な砂粒多量 に含む	良	外: 明赤褐 2.5YR 5/6 内: *	杯径の1/4 全体の 約40%	
55	010-03	試掘坑 No.4	土師器 高杯	脚台径: 9.0cm 残高: 6.2cm	脚部外面ナデ、内面ナデ ・シボリ	緻密	堅緻	外: 明赤褐 2.5YR 5/6 内: *	脚部の 約60%	
56	011-04	試掘坑 No.4	土師器 甕	残高: 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ?	微細な白色砂粒 多量に含むが密	良	外: ぶい橙 7.5YR 7/4 内: *	口径の 1/8弱	口縁部外面に スス付着
57	011-02	試掘坑 No.4	土師器 台付甕	残高: 3.2cm	脚部外面ハケ、内面ナ デ	φ 1mm以下の微 細な白色粒含む が密	堅緻	外: 灰褐 5YR 6/2 内: ぶい黄橙 10YR 6/3	脚部の 約40%	外面が二次焼 成によりわず かに赤変
58	010-02	試掘坑 No.4	土師器 甕	口径: 16.8cm 残高: 3.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ハ ケ、内面ナデ	微細な砂粒多量 に含むが密	良	外: ぶい黄橙 10YR 7/6 内: *	口径の 1/4	
59	010-04	試掘坑 No.4	土師器 短頸壺?	口径: 12.8cm 残高: 3.4cm	口縁部ヨコナデののち外 面はケズリ	密	良	外: ぶい褐 7.5YR 5/4 内: *	口径の 1/3	
60	011-01	試掘坑 No.4	製塩用 土製平釜	残高: 4.8cm	内外面ナデ、外面にタテ 方向の浅いハケ・指頭圧 痕もみられる	φ 1mm以下の微 細な砂粒多量に 含むが密	良	外: 浅黄橙 10YR 8/3 内: *	——	土師質 二次焼成による 赤化
61	010-01	試掘坑 No.4	須恵器 長頸壺	口径: 10.4cm 残高: 16.8cm 最大径: 16.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ロ クロナデ、底部ケズリ、 頸部に櫛描波状文	密、φ 1mm前後 の黒色物融出する	良	外: オリブ黒 5Y 3/1 内: 灰 5Y 5/1	全体の 約70%	ロクロ左回転か? 体部上半に灰被り、 半身に火がかり痕、 内面自然釉

番号	登録	遺構・層位	器種	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
62	012-01	試掘坑 No.8	土師器 高杯	残高: 6.2cm	脚部外面弱い面取り状のナデ、内面ナデ・シボリ	密	やや軟質	外: ぶい橙 7.5YR 6/4 内: 〃	脚部の約60%	
63	012-03	試掘坑 No.8	土師器 甕	残高: 1.8cm	口縁部ヨコナデ	φ 1mm以下の砂粒多量に含む	良	外: ぶい橙 7.5YR 6/4 内: 〃	口径の1/8	外面にスス附着
64	012-02	試掘坑 No.8	土師器 壺	底部径: 7.1cm 残高: 2.2cm	外面ナデ、内面ヘラナデ	φ 1mm以下の砂粒多量に含む	やや軟質	外: ぶい黄橙 10YR 6/3 内: 〃	底部径の1/2	
65	012-04	試掘坑 No.24	土師器 杯	残高: 3.4cm	外面多段ヨコナデ痕	緻密	やや軟質	外: 灰黄 2.5Y 6/2 内: 〃	口径の1/9	
66	センター⑦	表面採集 町資料館蔵	弥生土器 壺	残高: 16.4cm 底径: 5.3cm 最大径: 29.2cm	体部外面ヘラミガキ、内面ハケ	密	良	外: 橙 7.5YR 6/1 内: 〃	全体の約30%	器表面の磨耗著しい
67	センター⑭	表面採集 町資料館蔵	土師器 高杯	残高: 5.5cm	口縁部ヨコナデ、杯部ナデ	密	良	外: 黒褐 7.5YR 3/1 内: 橙 2.5YR 6/6	――	
68	センター⑮	表面採集 町資料館蔵	土師器? 壺?	残高: 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面にタテハケ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	良	外: ぶい橙 5YR 6/4 内: 〃	――	
69	センター⑧	表面採集 町資料館蔵	土師器 高杯	残高: 2.7cm	内外面ナデ	φ 5mm程度の小石や砂粒を多量に含むが密	良	外: ぶい褐 7.5YR 5/8 内: 褐灰 10YR 4/1	――	
70	センター⑯	表面採集 町資料館蔵	土師器 壺	残高: 1.7cm 底径: 3.4cm	内外面ナデ? 底部無調整	φ 5mm程度の小石や砂粒を多量に含むが密	良	外: ぶい黄褐 10YR 6/3 内: 〃	底径の約1/4	器表面の磨耗著しい
71	センター⑥	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕	口径: 12.9cm 残高: 4.4cm	口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ナデ・オサエ	微細な砂粒多量に含むが密	良	外: 灰黄褐 10YR 6/2 内: 〃	口径の1/3	外面に炭化物附着
72	013-01	東成志氏採集品	土師器 甕	口径: 13.4cm 残高: 6.8cm	口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面板ナデ	砂粒を多量に含むが密	良	外: ぶい黄褐 10YR 6/4 内: ぶい褐 7.5YR 6/3	口径の1/4	
73	センター⑰	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕	口径: 13.8cm 残高: 3.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、内面ヘラケズリ	密	良	外: 灰黄褐 10YR 6/2 内: ぶい黄橙 10YR 6/3	口径の1/4	内面にヘラ当たり痕
74	センター⑱	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕	口径: 18.7cm 残高: 5.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ナデか?	φ 2mm~5mmの砂粒含むが密	良	外: 浅黄橙 10YR 8/4 内: 〃	口径の1/5	器表面の磨耗著しい
75	センター⑳	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕	口径: 19.6cm 残高: 6.5cm	口縁部ヨコナデ、内外面ハケ	密	良	外: 浅黄橙 2.5Y 6/2 内: 〃	口径の1/6弱	
76	センター㉑	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕	口径: 19.6cm 残高: 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ハケか?	微細な砂粒多量に含むが密	良	外: 灰黄 10YR 8/3 内: 〃	口径の1/8	
77	センター④	表面採集 町資料館蔵	須恵器 杯蓋	口径: 10.9cm 器高: 3.7cm	体部ロクロナデ、頂部ロケズリ	φ 4mm程度の小石含むが密	やや軟質	外: 灰 5Y 6/1 内: ぶい黄橙 10YR 6/3	全体の約70%	
78	センター⑳	表面採集 町資料館蔵	須恵器 杯蓋	口径: 12.5cm 残高: 2.7cm	体部ロクロナデ、頂部ロケズリ	密	良	外: オリーブ黒 7.5Y 3/1 内: 浅黄 2.5Y 7/3	口径の1/6	器表面磨耗のため、調整不明
79	センター⑦	表面採集 町資料館蔵	土師器 杯	口径: 12.5cm 器高: 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒多量に含むが密	良	外: ぶい黄橙 10YR 6/3 内: 〃	口径の1/4	
80	センター㉒	表面採集 町資料館蔵	土師器 皿	口径: 17.4cm 器高: 2.4cm	調整不明	緻密	良	外: 橙 5YR 7/6 内: 明赤褐 5YR 5/6	口径の1/3	器表面の磨耗著しい
81	センター⑱	表面採集 町資料館蔵	須恵器 甕	口径: 20.8cm 器高: 3.8cm	体部ロクロナデ、外面カキ目	密	良	外: 暗灰 N3/ 内: 〃	口径の1/4	豊浦遺跡出土か? 内面に灰かぶり痕
82	センター㉓	表面採集 町資料館蔵	須恵器 杯蓋	口径: 6.5cm 器高: 1.7cm	体部ロクロナデ、内面ナデ、宝珠つまみ貼付	緻密	良	外: 黄 2.5Y 8/6 内: 〃	ほぼ完形	豊浦遺跡出土か?
83	センター⑲	表面採集 町資料館蔵	須恵器 杯蓋	残高: 1.4cm	体部ロクロナデ、頂部ロケズリ、宝珠つまみ	密	良	外: 灰 7.5Y 6/1 内: 〃	全体の約20%	重ね焼き痕あり
84	センター⑤	表面採集 町資料館蔵	須恵器 台付杯	口径: 11.6cm 台径: 9.4cm 器高: 4.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部外面調整不明	緻密	やや軟質	外: 橙 5YR 7/6 内: 〃	全体の約30%	器表面の磨耗著しい
85	センター②	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕?	――	外面ナデ・ハケ、内面ナデ	微細な砂粒多量に含む	良	外: ぶい黄橙 10YR 7/4 内: 〃	――	
86	センター㉔	表面採集 町資料館蔵	土師器 甕	口径: 28.4cm? 残高: 11.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ	密	良	外: 浅黄橙 7.5YR 8/6 内: 〃	残存程度不明	
87	センター⑪	表面採集 町資料館蔵	土製品 有溝土錘	全長: 5.2cm? 全幅: 3.0cm	全面ナデ	密	良	外: ぶい黄橙 10YR 7/2 内: 〃	ほぼ完形	
88	センター⑩	表面採集 町資料館蔵	土師器 皿	口径: 8.7cm 器高: 2.1cm	体部ナデ・オサエ	密	やや軟質	外: ぶい黄橙 10YR 6/4 内: 〃	全体の約1/4	
89	センター⑨	表面採集 町資料館蔵	陶器小皿 (山皿)	残高: 1.4cm 底径: 3.2cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕	密	良	外: 灰 5Y 6/1 内: 〃	底部のみ残存	
90	センター①	表面採集 町資料館蔵	灰釉陶器 碗	口径: 18.2cm 残高: 4.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、灰釉ツケガケ	僅かに溶解した黒色物含むが密	良	外: 灰白 2.5Y 7/1 内: 〃	口径の約1/4	口縁部に輪花表現、見込み以降灰による自然釉
91	センター㉕	表面採集 町資料館蔵	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 7.0cm 残高: 2.2cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕、貼付高台	密	良	外: 灰黄 2.5Y 6/2 内: 〃	口径の1/4	
92	013-02	東成志氏採集品	陶器碗 (山茶碗)	高台径: 6.6cm 残高: 2.8cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕、貼付高台	微細な砂粒を多量に含量に含むが密	良	外: 黄灰 2.5Y 6/1 内: 〃	底径の1/4	高台に粗殻痕

ないが、当地域の土製平釜には2型式以上のものが存在するらしい。

4. 紀伊長島町立郷土資料館収蔵他の道瀬遺跡出土遺物(66~92)

今回の発掘調査以前から地元の研究者らによって採集された道瀬遺跡の遺物があり、大部分は紀伊長島町の郷土資料館に収蔵されている。弥生時代から鎌倉時代までの遺物があり、今回の調査ではあまりみられなかった奈良時代~平安時代の資料も含まれる。いずれも出土・採集状況はよく分からない。遺物には資料館の展示ケースに納められ、道瀬遺跡出土と表示されたものと、遺跡名を表示した整理用の木箱に納められたものがあるが、同町三浦の豊浦遺跡出土の資料も混入していた。今回紹介する資料からは極力オミットしたが、注記がないため混入してしまった資料も若干含まれる可能性がある。

この中で最も古いとみられるものは弥生時代中期のものともみられる壺の体部(66)で、内面にヨコハケ、外面によわいヨコハケとヘラミガキの痕跡が残る。弥生時代末~古墳時代初頭には(67~70)があり、東海地方の欠山式・廻間式に併行する段階のものである。古墳時代中期以降~飛鳥時代とみられるもの(71~83)では土師器甕が目立ち、ここにも東海系の台付甕(71・72)が含まれる。

古墳時代後半~平安時代の遺物では、「工字型土錘」と呼ばれる有溝土錘(87)がある。瀬戸内海から紀

伊半島沿岸で出土し、明和町斎宮跡を北限として伊勢湾口まで分布が知られており、奈良時代以降に広がってきたといわれる。また土師器や須恵器の杯・皿類のような供膳形態のものや、甑などの煮沸形態のものまでみられる。

時期不明の資料としては石器類がある。本調査でも出土している礫石器類(94, 95)の他、磨製石斧(93)がある。

註)

- ① 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター 1994
- ② 前掲①
- ③ 赤塚次郎『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990
- ④ 田辺昭三『須恵器大成』1981
- ⑤ 前掲④
- ⑥ 前掲①
- ⑦ 湊章治他『紀伊長島町史』P39 1985
- ⑧ 近藤義郎編『小海』磯部町教育委員会 1976
- ⑨ 伊藤秋男編『迫間浦道瀬遺跡』南勢町教育委員会 1976
- ⑩ 伊藤裕偉『東海道遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1989
- ⑪ 前掲④
- ⑫ 田中禎子『漁の技術史』一宮市博物館 1994

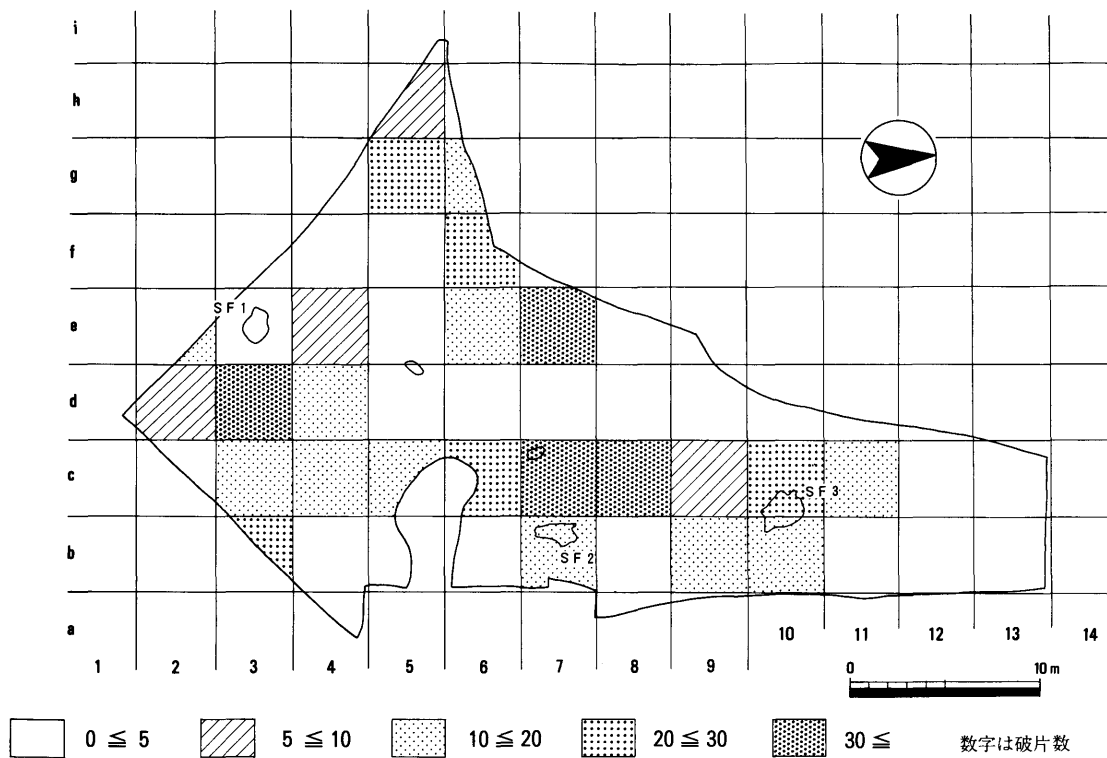
V 結 語

今回の調査では、幅広い時期の遺物が出土しているが、遺構としては平安時代末~鎌倉時代の製塩炉および野外炉が検出されたにすぎない。ここでは、道瀬遺跡を性格づける製塩炉と製塩用土製平釜を中心に検討し、この遺跡の性格等についてもう少し整理してみたい。

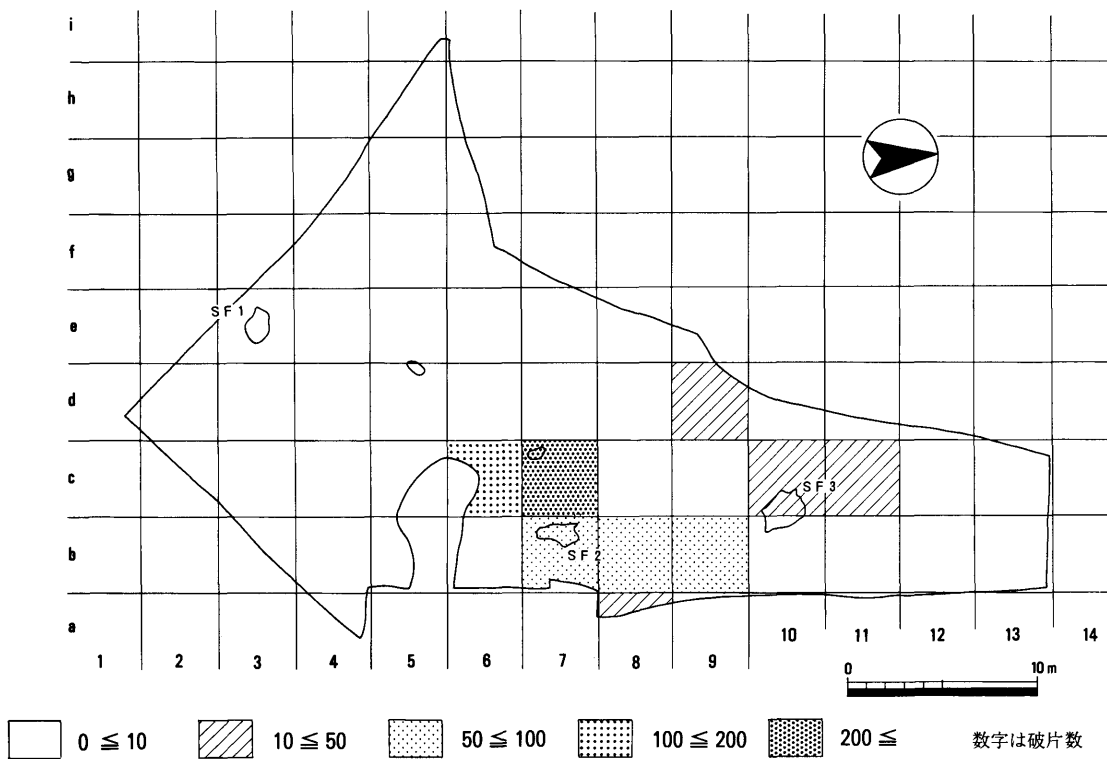
まず、調査区に設定した4m×4mの小地区ごとに製塩用土製平釜(土釜)の出土破片数をカウントし、示したのが第17図である。極めて明快な分布状況を示しており、7-c区を中心として2基の製塩炉、特にSF2を中心とした範囲で大量に出土している事が分かる。これは同様の作業により作成した弥生時代末~古墳時代の遺物分布図(第16図)が、

調査区全体に散在した状況を示しているのとは対照的である。つまり、土釜は実際にこの製塩炉で使用されていた事を間接的に傍証しているのであり、作業工程を考える上でも重要な点であろう。また、調査区が南北方向に細長い形をしているため、砂堆の後背地の状況が十分掴みきれないものの、製塩炉の東側、つまり海側の製塩炉の焚き口とみられる側に分布がやや偏っているようであり、あるいは破損した土釜を掻き出した結果ともみられる。

この製塩炉や土釜についてはいくつかの例が知られている。藤井直正氏らにより度会郡南島町楠江遺跡の「土製皿」が製塩炉とともに報告されており、土釜は厚さ1.5cm~2.0cm、直径1.8m~2.0mの「ほ



第16図 本調査出土弥生時代末～古墳時代遺物分布図 (1 : 400)



第17図 本調査出土土製平釜分布図 (1 : 400)

うらく」状のものが想定されている。12世紀後半の山茶碗が伴出しており、道瀬遺跡とも時期的に近似するが、炉には断面から最下層に被熱した石敷きがあり、その上に灰層や炭層がのる構造で、道瀬のように粘土による構築物は無い。ただ土釜については、胎土や厚み、口縁端部の形状等、道瀬例と共通する点が多い^①。土釜は志摩郡磯部町塩崎遺跡でも同様のタイプが報告されている^②。土釜は志摩半島から東紀州の沿岸部に分布している事が知られるのである。

湊章治氏・伊藤良氏の復元案によれば、紀伊長島町の城ノ浜遺跡の踏査や採集品の事例から、土釜は直径約80cm、深さ約12cmで糸切りの底部を持つ巨大な浅い杯状を呈するとしており、礫を組んでカマド状に設えられた炉の上にかける事になっている^③。

製塩炉については、先の楠江遺跡の他に学史的に有名な志摩郡磯部町小海遺跡の室町時代の鉄釜を使用したとみられるものがある。これは、およそ4.8m×4.0mの浅いすり鉢状の炉体に長さ約1.8mの石組みを伴う焚き口がつき、鉄釜を支えるための4つの支柱穴があり^④、道瀬遺跡とはかなりの懸隔がうかがわれるものである。

道瀬遺跡のSF2・3は砂浜上に粘土で半球状に炉体を作り、内部に置かれた平石の被熱状況からも北東方向から焚きあげられた事が推察される。炉体の規模は直径で2.0m×2.5mほどあり、炉体上部に直接土釜をかける事はできない。そこでいずれにも見られた長径約70cm～90cmの平石が置き台として機能したのではないかと推定される。また、炉跡周辺に散在していた焼けた角礫も台として使われた可能性はある。他の遺跡の例に対し、粘土をもって炉体を構築する点が大きな違いだが、あるいは砂堆上に構築するための特殊な例なのかもしれない。

次に、SF2・3が鹹水を濃縮・結晶化する煎熬の過程で使用されるのか、あるいは粗塩を再度加熱して精製塩を作る過程で使用されるのが問題となる。先述の小海遺跡や楠江遺跡の炉は煎熬用とみられているが、道瀬遺跡の場合、現在の段階ではそのいずれについても不明な点がある。

まず煎熬過程のものとする、土釜にその痕跡が乏しい。炉体の被熱状況からはかなりの高温で長期間使用されたとみられるが、土釜には赤化や亀裂、

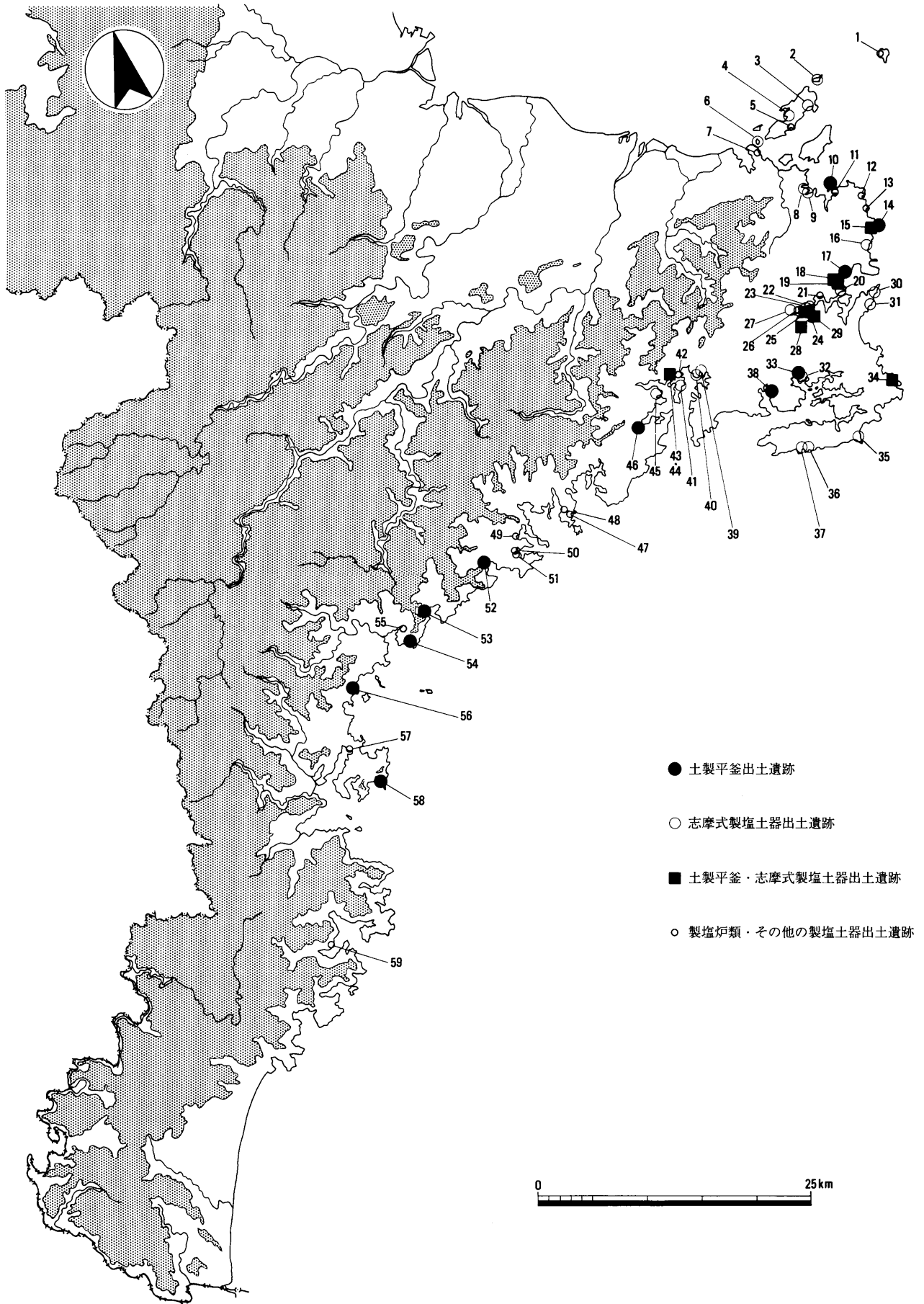
ススや海水成分の付着もほとんどみられず、また、炉体の粘土が残存する上端まで強く被熱した状況を残しており、火をかけながら鹹水を注ぎ込み続ける事は炉体の構造と土釜の形状から困難な作業と思われる。土釜の器表面も内外面とも平滑とはいえず、間隙も多いため、鹹水を蒸発させれば土器内部で結晶化し破砕する恐れがある。

ただし、地元住民からの聞き取りでは、昭和の戦後まで鉄板で一辺約1mの方形で深さ約10cmの浅い角皿状のものを作り、円礫を組んで作った簡便なカマドで海水を直炊きして粗塩を生産していたそうである。径1m程度の浅い形状は、度会郡二見町荘の御塩殿神社で伊勢神宮に貢納する塩を作る際に使用する鉄釜ともよく似た大きさであり、材質は異なるものの土釜に通じるものがある。現在も神宮に貢納する塩は、先述の御塩殿神社にある御塩焼所で海水を濃縮して粗塩を作り（御塩焼き）、それを同じ敷地内の御塩殿で三角錐の素焼きの型に入れて堅塩を作る（御塩焼き固め^⑤）。この他にも近世まで日本各地で使用されていた鉄釜はほぼ同様の浅い盤状のものであったようである^⑥。

他の塩釜では、近世の例だが名古屋市星崎の製塩釜跡は石柱や土柱を数十本炉底に並べ、その上に偏平な石を並べてその隙間を粘土で充填し、これを焼き固めて釜としたものが知られている^⑦。石と粘土を固めた「釜」を下から支える構造は、道瀬遺跡のSF2・3のような構造が効率化、大型化された姿と見ることもできないだろうか。

以上、他の製塩炉とも比較してみたが、道瀬遺跡の製塩炉SF2・3を鹹水を濃縮し、粗塩を作る為のものを見ると、あるいはSF1が土師器鍋や山茶碗を伴うものの、堅塩か精製塩を作るカマドであった可能性も指摘できよう。また、道瀬遺跡では粗塩だけが作られて運ばれ、外部で精製塩にしたとも考えられる。逆にSF2・3を精製塩を作る過程のものとみると、散状塩しか作り得ず、また粗塩を作る工程を、今回の調査区外で全く別の形で想定しなければならなくなる。現在の状況では、決定的な根拠を見いだせないが、鹹水の煎熬過程で使用された可能性の方が高いように思われる。

製塩炉については資料が少なく、機能や地域的な



第18図 志摩半島～東紀州海岸部の製塩関係資料分布図 (1 : 500,000)

第2表 志摩半島～東紀州海岸部の製塩関係資料出土遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	遺構	遺物
1	乾遺跡	鳥羽市神島町乾	—	知多～渥美式製塩土器
2	大築海島遺跡	〃 答志町大築海	—	志摩式製塩土器
3	おばたけ遺跡	〃 答志町和具大畑	—	志摩式製塩土器
4	奈佐遺跡	〃 桃取町奈佐	—	志摩式製塩土器 知多～渥美式製塩土器
5	長者カ浜遺跡	〃 答志町長者浜	—	知多式製塩土器
6	イルカ島遺跡	〃 小浜日向島	—	志摩式製塩土器片
7	広畑遺跡	〃 小浜町広畑	—	製塩土器片
8	向い製塩遺跡	〃 安楽島町向ヒ	—	志摩式製塩土器
9	贅遺跡	〃 安楽島贅	製塩炉跡?	志摩製塩土器・知多式製塩土器
10	大村島製塩跡	〃 浦村町大村	—	塩崎式製塩土器
11	小白浜A遺跡	〃 浦村町小白浜	焼石散布	製塩土器片
12	大木遺跡	〃 石鏡町大木	—	製塩土器片
13	若神子製塩跡	〃 国崎町若神子	焼石	—
14	鑑崎遺跡	〃 国崎町鑑崎	—	製塩用土鍋片
15	大津遺跡	〃 国崎町大津	—	志摩式製塩土器・製塩用土釜
16	釜ヶ浦遺跡	〃 相差釜ヶ浦	—	志摩式製塩土器
17	前浜遺跡	〃 千賀町前浜	—	塩崎式製塩土器
18	長浜製塩遺跡	志摩郡磯部町の矢字浄土	—	志摩式製塩土器・塩崎式製塩土器
19	水石製塩遺跡	〃 〃 的矢字水石	—	志摩式製塩土器・製塩用土鍋
20	長瀬遺跡	〃 〃 的矢字長瀬	—	志摩式製塩土器
21	小海製塩遺跡	〃 〃 山田字小海	製塩炉1基	—
22	丸海製塩遺跡	〃 〃 飯浜字丸海	—	志摩式製塩土器
23	飯浜製塩遺跡	〃 〃 飯浜字の岡	製塩炉5基	志摩式製塩土器
24	前ノ浜貝塚	〃 〃 飯浜字の岡	—	塩崎式製塩土器
25	おうみ製塩遺跡	〃 〃 飯浜字中ノ田	製塩炉?	志摩式製塩土器・製塩用土鍋
26	カマノアト製塩遺跡	〃 〃 下之郷字大矢	—	—
27	下之郷製塩遺跡	〃 〃 下之郷字中村	—	志摩式製塩土器
28	塩崎遺跡	〃 〃 坂崎字アブミ	製塩炉	志摩式製塩土器・塩崎式製塩土器
29	城山製塩遺跡	〃 〃 坂崎字城山	—	志摩式製塩土器・塩崎式製塩土器
30	里中(安乗)遺跡	志摩郡阿児町安乗字里	—	志摩式製塩土器
31	渡シ浜製塩遺跡	〃 〃 安乗字渡シ浜	焼石散乱	志摩式製塩土器
32	焼ノ崎製塩遺跡	〃 〃 神明字焼ノ崎	炉跡	志摩式製塩土器・脚台式製塩土器
33	宇島製塩遺跡	〃 〃 鷯方字タチメ	灰層	塩崎式製塩土器
34	大井ノ浜製塩遺跡	志摩郡大王町名田字大井ノ浜	炉跡	志摩式製塩土器・塩崎式製塩土器
35	オトベ遺跡	志摩郡志摩町片田オトベ	—	志摩式製塩土器
36	阿津里貝塚	〃 〃 越賀字阿津里	—	志摩式製塩土器
37	波田遺跡	〃 〃 越賀字波田	—	志摩式製塩土器
38	安目浦製塩遺跡	志摩郡浜島町迫子字安浦目	—	塩崎式製塩土器
39	深浦遺跡	度会郡南勢町飯満深浦	—	志摩式製塩土器
40	グミノ木浦製塩遺跡	〃 〃 飯満グミノ木浦	粘土層灰層	志摩式製塩土器
41	松鼻製塩跡	〃 〃 五ヶ所浦字岩崎	—	志摩式製塩土器
42	野添遺跡	〃 〃 船越野添	—	—
43	船越大浦製塩遺跡	〃 〃 船越字大浦	粘土層	志摩式製塩土器・塩崎式製塩土器
44	船越ヒロサキ製塩遺跡	〃 〃 船越	—	志摩式製塩土器・塩崎式製塩土器
45	コタロ谷遺跡	〃 〃 迫間浦コタロ谷	—	志摩式製塩土器
46	大三浦製塩遺跡	〃 〃 迫間浦字大三浦	焼土・灰層	塩崎式製塩土器
47	カサラギ製塩遺跡	度会郡南島町奈屋字カサラギ	—	製塩土器
48	カラサギ遺跡	〃 〃 道行字カラサギ	—	製塩土器
49	足水製塩遺跡	〃 〃 方座字足水	製塩炉2基	—
50	寺倉製塩遺跡	〃 〃 方座字寺倉	製塩炉2基	—
51	たちばな谷製塩遺跡	〃 〃 方座字橘谷	炉跡3基	—
52	楠江製塩遺跡	〃 〃 新桑竈	製塩炉1基 灰層	塩崎式製塩土器
53	名古製塩遺跡	度会郡紀勢町錦字名古	—	塩崎式製塩土器
54	城ノ浜製塩遺跡	北牟婁郡紀伊長島町城ノ浜	製塩炉10基	製塩用土釜
55	大名倉製塩遺跡	〃 〃 大名倉	製塩炉1基	—
56	道瀬遺跡	〃 〃 道瀬字新田	製塩炉2基	製塩用土釜
57	矢口網代遺跡	北牟婁郡海山町矢口網代	—	—
58	元須賀利遺跡	尾鷲市須賀利字沢の浦	—	製塩用土釜片
59	古江遺跡	〃 古江	—	目良式製塩土器

この地名表は、下記の文献を基本に作成した。
尚、位置を正確に限定できないものは除外した。

古代を考える会『狭製塩遺跡の検討』P40,41 1981
山本雅靖「志摩式製塩土器考」『考古学論集』第3集 古代を考える会 1990
〃 「三重県」『日本土器製塩研究』1994
西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器」『シンポジウム製塩土器の諸問題』塩の会 1997
三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財包蔵地一覧表』(1)～(5) 1970～1981

差異などまだまだ不明な点が多いが、土釜と分布域の重なる「志摩式製塩土器」との関係はどうだろうか。志摩半島から東紀州にかけての製塩関係の資料が知られる遺跡の分布を第18図、その内容等を第2表に示した。ここで「塩崎式製塩土器」「製塩用土鍋」というのは土釜の事である。

志摩式製塩土器は、南は南勢町までその分布が知られるが、以南では知られていない。逆に土釜は志摩半島から東紀州一帯に分布している事が分かる。山本雅靖氏によれば、志摩式製塩土器は8世紀後葉には出現し、11世紀前半のうちに消失していくとされる^⑧。土釜は12世紀代には出現したとみられ、若干の時間的間隙があるが、明確な段階差がある。また志摩式製塩土器は、旧志摩国内のみならず、伊勢国や伊賀国の内陸地まで分布しており、固形塩を生産するためのものとする見方が強い。その点からも分布が海岸部に限定され、大きさからも運搬に困難な土釜は煎熬用のものとみる方が自然であろう。

第Ⅱ章でもふれたとおり、当地域は古代末期～中世前期には丹島・中島・木本の御厨があったとされる。伊勢神宮が律令制度の衰退に伴い、その経済的基盤を神田・神戸などから御厨・御菌へ転換していった時期にあたり、特に11世紀後半以降は荘園化が進んで貢進体制が強化されたといわれている^⑨。旧志摩国とはいえ、地形上の制約の大きい当地域では、この時期になって塩などの海産物を貢納する事で神宮との結びつきを強めたとみられ、その主体となるのは「荘司家文書」にあらわれるような在地性の強い人々と推定される^⑩。これは、鎌倉前期には古式入浜塩田が発達し、「御塩焼内人」と呼ばれる専門的な「職人」によって製塩が行われていたとされる伊勢国の御厨・御菌とは対照的な状況といえる^⑪。

南北朝期になると、神宮勢力が低下するとこの貢納関係も途絶し、道瀬を始めこの地域での大きな構築炉を伴った製塩も終焉する事となる。道瀬遺跡の

製塩炉は、そうした神宮勢力の盛衰と深く関連したものとみる事ができるのである。

今回の調査では、古代末期～中世前期の製塩炉を発見するという極めて大きな成果を上げる事ができたが、依然製塩の具体的な過程を復元するまでには至らなかった。古墳時代の遺構の発見や、加工痕のある礫の機能の解明など多くの課題も残している。東紀州の歴史も、中央や他の地域の動向と断絶したものであつたのであり、この地域での調査例が蓄積されていく事が強く望まれる。

註)

- ① 藤井直正他『伊勢南島町の考古学的調査』1966
 - ② 近藤義郎編『小海』磯部町教育委員会 1976
 - ③ 湊章治他『紀伊長島町史』P39 1985
 - ④ 前掲②
 - ⑤ たばこと塩の博物館『伊勢神宮の塩づくり』1981
 - ⑥ 廣山堯道『塩の日本史』P97～P100 1990
 - ⑦ 三渡俊一郎編『星崎の塩浜』1971
 - ⑧ 山本雅靖「志摩式製塩土器考」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会 1990
 - ⑨ 稲本紀昭「御厨」『国史大辞典』第13巻 吉川弘文館 1992
 - ⑩ 伊藤良「道瀬浦」『三重県の地名』平凡社 1983
- 前掲⑧でも、土製平釜による塩生産は、古代的な生産体制を離れて、より在地性の強い生産が行れたと評価するが、技術的系譜はともかく、その消長からは神宮の影響を考えない訳にはいかない。
- ⑪ 網野善彦「中世の製塩と塩の流通」『講座・日本技術の社会史第二巻 塩業・漁業』日本評論社 1985



道瀬遺跡遠景(南東から)



道瀬遺跡遠景(東から)

図版 2



調査前風景(南西から)



調査前風景(北から)



調査区全景(南西から)



調査区全景(北から)



6 - f 区包含層遺物出土状況(北西から)



S F 1 完掘状況(東から)



S F 3 検出状況(南から)



S F 3 上面検出状況(北東から)



S F 3 完 掘 状 況 (北 東 か ら)



S F 3 完 掘 状 況 (西 か ら)



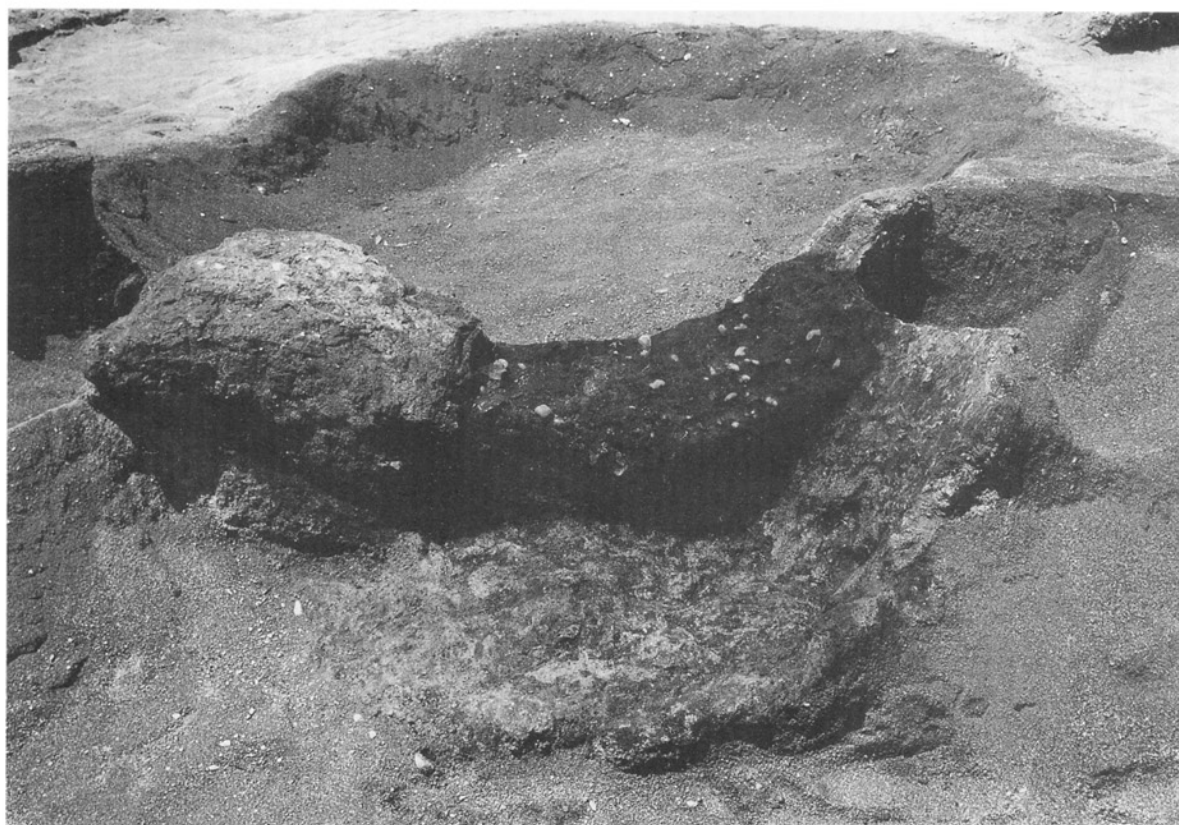
S F 3 完掘状況(北から)



S F 2 検出状況(東から)



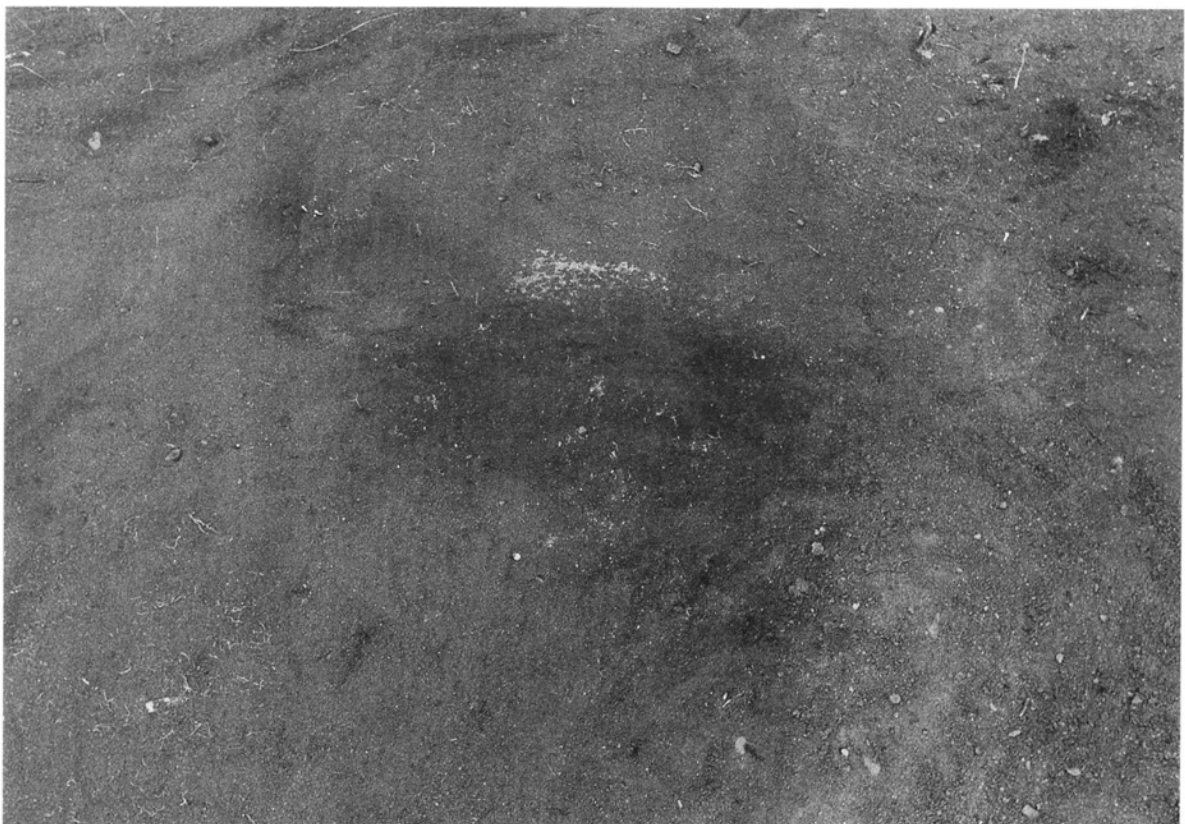
S F 2 平石 検出 状況 (東 から)



S F 2 埋土 半裁 状況 (東 から)



S F 2 炉 体 完 掘 状 況 (東 か ら)



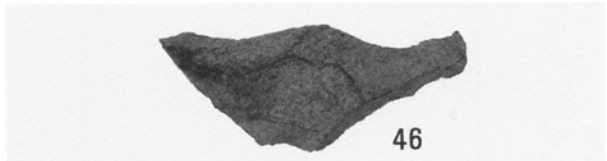
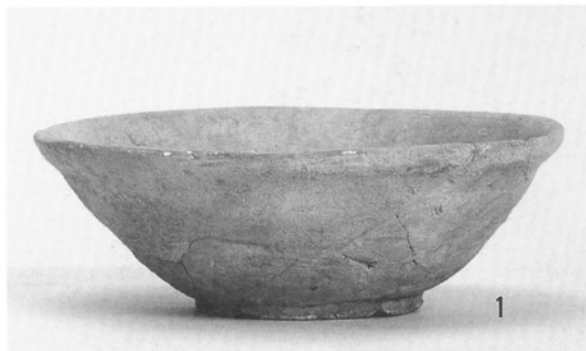
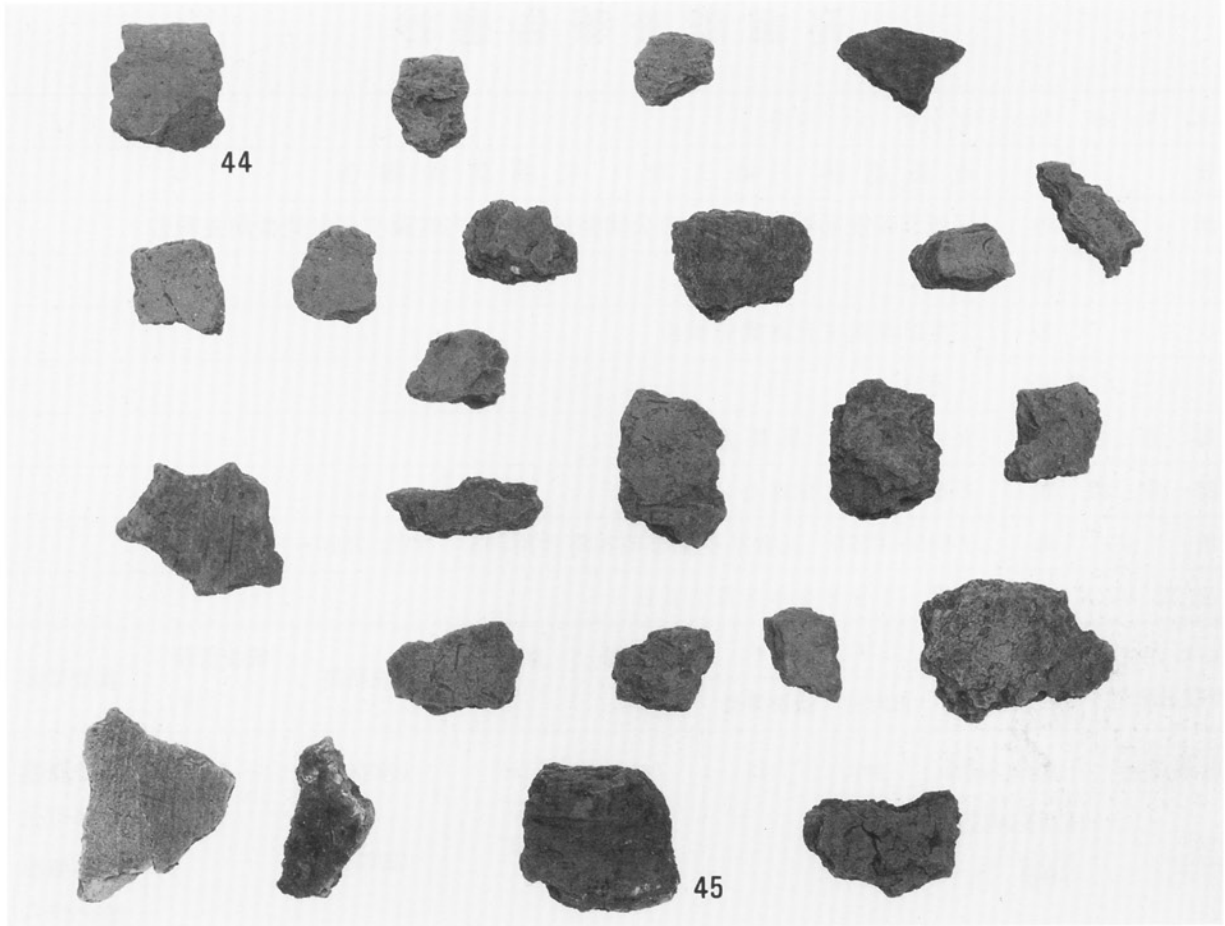
P i t 1 検 出 状 況 (南 か ら)



調査風景（北東から）



調査参加者



出土遺物

発掘調査報告書抄

ふりがな	どうぜいせき							
書名	道瀬遺跡（第1次）発掘調査報告							
副書名	平成9年度熊野灘臨海都市公園整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	なし							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	183							
編著者名	大川勝宏 萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 1998年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうぜいせき 道瀬遺跡	みえけんきたひらうぐん 三重県北牟婁郡 きいながしまちようどうぜ 紀伊長島町道瀬 あざしんでん 字新田	541	12	34° 10' 05"	136° 17' 52"	19970630 19970804	700	熊野灘臨海都市公園整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道瀬遺跡	製塩跡	古墳～ 鎌倉	製塩炉 野外炉 焼土面		古式土師器、土師器 須恵器、土製平釜、 山茶碗、山皿		鎌倉時代の土製平釜を伴う製塩遺構	

平成 10(1998) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 183

平成 9 年度熊野灘臨海都市公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

道瀬遺跡（第 1 次）発掘調査報告

1998年 3 月

編 集 三重県埋蔵文化財センター
発 行
印 刷 光出版印刷株式会社
